

「地域のヨーロッパ」の再検討（6）

——ドイツ・ネーデルラント国境地域に即して——

渡 辺 尚

VIII. 事例3：euregio rhein-maas-nord / euregio rijn-maas-noord

(5) INTERREG IIIA (2000～2008)

1) 資料と分析方法

これまでの *ermn* の地域特性の検討を踏まえて、ここで INTERREG IIIA 企画の検討を行う。INTERREG IIIA (2000～2008) はすでに終了し、引き続き INTERREG IVA (2007～2013) が目下進行中である。INTERREG IIIA の総括的数値情報は *ermn* のウェブサイトから入手できるが、残念ながらそれは現時点できわめて不十分なものでしかない¹⁾。表 VIII-11 で示されるように、2008 年計画期間満了時の集計は、最重要な重点分野 2「経済、技術、革新、観光」および同 6「技術支援」にかかる数値情報を欠くので、全体像を把握することができないからである。INTERREG IIIA で *ermn* に EU から総額 2100 万ユーロが補助されたとされるので、4 重点分野への EU 補助金総額 800 万ユーロを差し引いた残額、1300 万ユーロ、実に EU 補助金の 62% の用途が把握できないことになる。ただし、この数値の信憑性には疑問が残る。中仕切りを行った 2004 年末の両重点分野への EU 補助金比率は、それぞれ 33.4%、10.1% であったので、計画期間満了時の数値がこれと大きく隔たることは考えられないからである。ともあれ、表 VIII-11 の欠落を補うために、全重点分野の数値が揃っている 2004 年末時点の数値を参考資料として利用することにする（表 VIII-12 参照）。本稿の目的は INTERREG IIIA 企画それ自体の分析にではなく、これを手がかりにして *ermn* 領域の空間構造・動態を探ることにあるので、制約された数値資料であってもこれから目的に適う何らかの情報を見出すことができれば、それで足りよう。

このような問題関心から表 VIII-11 を点検すると、まず気づくことは総費用の負担配分比率で、EU 補助金がわずかな例外を除き 50% で一定しているのに対して、NRW/Provincie と地元自治体等との負担比率は分野によりかなり異なることである。それは企画策定にあたり両者の相対的積極度を反映するとみてよからう。連邦制のドイツと対照的に中央集権制をとるネーデルラントの Provincie を、国の出先機関の性格が強いとみなすことができるかぎり、NRW と Provincie を同一範疇に属すると解釈できる。そうして NRW/ Provincie の負担比率が相対的に高ければ、当該企画は「上からの地域政策」としての性格が比較的強く、したが

表 VIII-11 *ernn* の INTERREG IIIA 企画の費用負担（2008 年終了）

重点分野・企画	実施期間	経費総額	EU	NRW	Province	自元
1 空間構造						
① <i>euregio</i> 地域資料	2005.7.1 ~ 2008.7.30	2188375 75.4 100.0	1094187 75.4 50.0	328256 70.1 15.0	328256 70.1 15.0	437675 83.3 20.0
② A52/N280	2001.1.1 ~ 2003.11.30	275000 9.5 100.0	137500 9.5 50.0	68750 14.9 25.0	68750 14.9 25.0	
③ 大気浄化	2006.10.1 ~ 2008.5.31	440000 15.2 100.0	220000 15.2 50.0	66000 14.3 15.0	66000 14.3 15.0	88000 16.7 20.0
小計		2903375 100.0 100.0	1451687 100.0 50.0	463006 100.0 16.0	463006 100.0 16.0	525675 100.0 18.1
2 経済、技術、革新、観光	別表参照					
3 環境、自然、農業						
① 国境を越える生態圏	2002.5.1 ~ 2007.12.31	1795400 57.0 100.0	897700 57.0 50.0	269310 57.0 15.0	269310 57.0 15.0	359080 57.0 20.0
② マース・シュバルム・ネデ公園	2002.7.1 ~ 2007.6.30	815000 25.9 100.0	407500 25.9 50.0	122250 25.9 15.0	122250 25.9 15.0	163000 25.9 20.0
③ LOEWE-GIS	2006.9.1 ~ 2008.6.30	539963 17.1 100.0	269982 17.1 50.0	80994 17.1 15.0	80994 17.1 15.0	107993 17.1 20.0
小計		3150363 100.0 100.0	1575182 100.0 50.0	472554 100.0 15.0	472554 100.0 15.0	630073 100.0 20.0
4 資格教育・労働市場						
① IT アカデミー	2002.7.1 ~ 2003.6.30	300000 8.6 100.0	150000 8.6 50.0	45000 8.6 15.0	45000 11.2 15.0	60000 7.3 20.0
② 隣国での職業教育	2006.1.1 ~ 2008.6.30	486000 13.9 100.0	243000 13.9 50.0	72900 13.9 15.0	72900 18.1 15.0	97200 11.8 20.0
③ 物流の回転盤	2003.8.1 ~ 2006.6.30	75200 2.1 100.0	37600 2.1 50.0	11280 2.2 15.0	11280 2.8 15.0	15040 1.8 20.0

④一般教育のエウレギオ化	2002.8.1 ~	1224213	612000	183632	75000	353581
	2007.7.31	34.9 100.0	34.9 50.0	35.0 15.0	18.6 6.1	42.7 28.9
⑤ 2 週間隣国実習	2006.1.1 ~	148600	74300	22290	22290	29720
	2007.12.31	4.2 100.0	4.2 50.0	4.3 15.0	5.5 15.0	3.6 20.0
⑥越境する杜健	2006.1.1 ~	705715	352858	105857	105857	141143
	2008.6.30	20.1 100.0	20.1 50.0	20.2 15.0	26.3 15.0	17.1 20.0
⑦ジョブロボット	2006.7.10 ~	252841	126421	37926	37926	50568
	2008.6.30	7.2 100.0	7.2 50.0	7.2 15.0	9.4 15.0	6.1 20.0
⑧失業者の資格教育	2003.1.13 ~	315357	157679	45411	32076	80191
	2004.2.28	9.0 100.0	9.0 50.0	8.7 14.4	8.0 10.2	9.7 25.4
小計		3507928	1753858	524296	402329	827443
		100.0 100.0	100.0 50.0	100.0 15.0	100.0 11.5	100.0 23.6
5 社会・文化的統合						
① EIS 企画	2005.9.1 ~	177038	88519	26555.70	26555.70	35407.60
	2008.6.30	2.7 100.0	2.8 50.0	3.7 15.0	3.7 15.0	2.0 20.0
②記憶の蘇生	2005.7.1 ~	839743	419871	123461	123461	172950
	2008.6.30	12.9 100.0	13.1 50.0	17.2 14.7	15.7 14.7	9.6 20.6
③健康フォーラム	2003.1.1 ~	299800	149900	30488	30488	88924
	2005.12.31	4.6 100.0	4.7 50.0	4.2 10.2	3.9 10.2	4.9 29.7
④ HERMAN	2006.9.1 ~	978547	468687		60000	449860
	2008.6.30	15.0 100.0	14.6 47.9		7.6 6.1	24.9 46.0
⑤若者を寛容に	2005.4.1 ~	170673	88335	25300.50	25300.50	34737
	2008.6.30	2.6 100.0	2.7 50.0	3.5 14.8	3.2 14.8	1.9 20.4
⑥ガラス彩画	2004.1.1 ~	624000	312000	93000	93000	126000
	2006.12.31	9.6 100.0	9.7 50.0	12.9 14.9	11.8 14.9	7.0 20.2
⑦人間と教会	2001.9.9 ~	2245492	1122746	285218	285218	552310
	2005.12.31	34.4 100.0	35.0 50.0	39.7 12.7	36.3 12.7	30.6 24.6
⑧高齢者施設改善	2004.11.1 ~	745100	372550	111275	111275	150000
	2007.11.30	11.4 100.0	11.6 50.0	15.5 14.9	14.2 14.9	8.3 20.1
⑨プロセインの遺徳	2003.3.1 ~	159000	79500	23850		55650
	2004.4.1	2.4 100.0	2.5 50.0	3.3 15.0		3.1 35.0

「地域のヨーロッパ」の再検討（６）

	2005.5.22 ～ 2006.12.31	26750	13375						
⑩ケセル伯の年		0.4	100.0	0.4	50.0				13375
⑪対話のオーケストラ	2005.3.15 ～ 2005.8.8	11428		5366				0.7	50.0
⑫エウレギオのための声	2006.2.1 ～ 2006.11.15	49000	100.0	0.2	47.0			0.3	53.1
⑬ルールモントの三世界選手権	2006.6.17 ～ 2006.6.24	62450	0.8	22000		18000		0.5	9000
⑭ルール・マインベーク地域	2006.3.1 ～ 2008.6.30	94300	1.0	25000		2.3	36.7	18.4	18.4
⑮世界音楽が結ぶ	2006.9.1 ～ 2007.9.30	39238	1.5	40.0		12500		0.5	24950
小計		6522559	0.6	19619		1.6	20.0	1.4	40.0
		100.0	100.0	3209468				3.8	73.5
				49.2				1.1	50.0
				719148.2		785798.2		18081446	
				100.0	11.0	100.0	12.1	100.0	27.7

注：（１）各企画の上段は実数値（ユーロ）、下段は負担割合（％）。ただし左側は費用負担者ごとの企画別構成比、右側は企画ごとの費用負担者別構成比。

（２）１③は Province の原数値が 25500 となっているが、66000 の誤記と推定される。

（３）４②は Province の原数値が 10000 となっているが、72900 の誤記と推定される。

（４）５⑤は総費用の原数値が 173670 となっているが、170673 の誤記と推定される。

（５）５⑧は地元負担の原数値が 80500 となっているが、150000 の誤記と推定される。

（６）５⑪は地元負担が空欄になっているが、6062 の書き落としと推定される。

出所：本文注 1）に同じ。

ってあくまで国境（州境）の存続を前提としたものであることになる。これに対して地元負担比率が相対的に高ければ、これは地元基礎自治体の主体性の強さを反映し、よって「下からの地域政策」としての性格が比較的強いことになる。後者は当然に現存国境の分断効果をできるだけ弱めることを狙うはずである。国境（州境）の存在意義に対する州/県と基礎自治体との相反する立場から生ずる緊張関係が、この負担比率の相違に反映していると観ることができよう。このような観点から負担比率を点検すると、地元自治体等の負担比率が平均を上回るのは重点分野 5 だけであり、地元自治体等の負担総額でも重点分野 5 だけで 47.7 % を占めていることに気づく。文化分野の企画で総じて地元自治体等の主体性が相対的に強いのはなぜか、これはけっして自明でなく、また問題を孕んでいるようにも思われる。

ただ、ここで注意しなければならないのは、表 VIII-11 では費用負担区分が EU, NRW, Provincie, Eigenmittel の 4 区分、VIII-12 では EU, Nationale, Regionale/Eigenmittel の 3 区分となっていることである。後者の Nationale とは NRW および NL を指し、Provincie が地元自治体等と同一範疇とされていることはほぼ確かである²⁾。したがって両表の数値をそのままつなげることはできない。

そこで以上を念頭に置き、エウレギオの空間政策が現実にとどのような空間効果を生むかという問題関心から、以下、各企画内容を順次資料の叙述に即して紹介しつつ検討を加えることにする。そのための基準として、空間政策については、地域性の準拠枠として現在の自然地理的等質空間への指向、現在は衰退した歴史的等質空間への回帰、現在の問題状況に適合する新しい結節空間の形成、以上 3 方向のいずれであるかを問う。たとえば環境保全のための共同事業に向かう場合は第一の、かつての共同文化圏の再生に向かう場合は第二の、国境を越える技術開発協力に向かう場合は第三の方向である。空間効果については、凝集効果と拡散効果のいずれが予想されるかを基準にする。地域政策の成果としてエウレギオ内部に求心力が生まれ、空間的一体性を強める可能性が認められる場合は前者だし、逆に遠心力が生まれ、たとえばエウレギオがライン・ルールもしくはラントスタトに吸引される可能性が強まることが予見される場合は後者である。

以上の方法的準備をふまえて、これから検討作業に入る。なお、参考までに *ermn* の基礎自治体区分を図 VIII-2 で示す。

2) 重点分野別検討

i) 重点分野 1：空間構造（3 企画）

①エウレギオの地域資料一覧

「地域資料」*Geodaten* の概念は、各地域を空間的に捉えるにあたり調査された多様な情報をまとめ上げることである。これには地誌情報を盛り込んだ地図、航空写真、地籍図、地理学的座標・尺度による数値が含まれる。自治体、経済界、政界がこれらの重要情報を早く入

表 VIII-12 *ernm* の INTERREG IIIA 企画の費用負担（2004 年末暫定値）

重点分野（企画数）	経費総額	EU	国	地域/地元
1 空間構造				
1) 国境を跨ぐ統合空間/機能開発 (1)	19887405 0.8 100.0	9943703 0.8 50.0		9943703 1.7 50.0
2 経済、技術、革新、観光				
1) 中小企業間協力、国境を越えて 広がる市場 (4)	3307134 12.8 100.0	1653567 12.9 50.0	889014 12.7 26.9	764553 12.8 23.1
2) 技術開発移転 (2)	3259604 12.7 100.0	1629802 12.8 50.0	871188 12.4 26.7	758614 12.7 23.3
3) 休養、観光 (3)	1965000 7.6 100.0	982500 7.7 50.0	589500 8.4 30.0	393000 6.6 20.0
3 環境、自然、景観、農業				
1) 環境、自然、景観 (3)	5582986 21.7 100.0	2791493 21.8 50.0	1663826 23.8 29.8	1127667 18.9 20.2
4 資格教育、労働市場				
1) 労働市場開発、労働者流動性、 資格教育・職場訓練・雇用の 国境を跨ぐ連携網 (5)	2768832 10.8 100.0	1384309.50 10.8 50.0	698298.25 10.0 25.2	686224.25 11.5 24.8
5 社会・文化的統合				
1) 社会的連携網、日常的国境 問題の処理 (2)	642522 2.5 100.0	321261 2.5 50.0	163792 2.3 25.5	157469 2.6 24.5
2) 文化、文化遺産、啓発 (5)	5270864 20.5 100.0	2635342 20.6 50.0	1150252 16.4 21.8	1485090 24.9 28.2

6 技術的支援

1) INTERREG III の計画管理 (1)

2) 報告, 検査, 評価, 情報, 広報 (1)

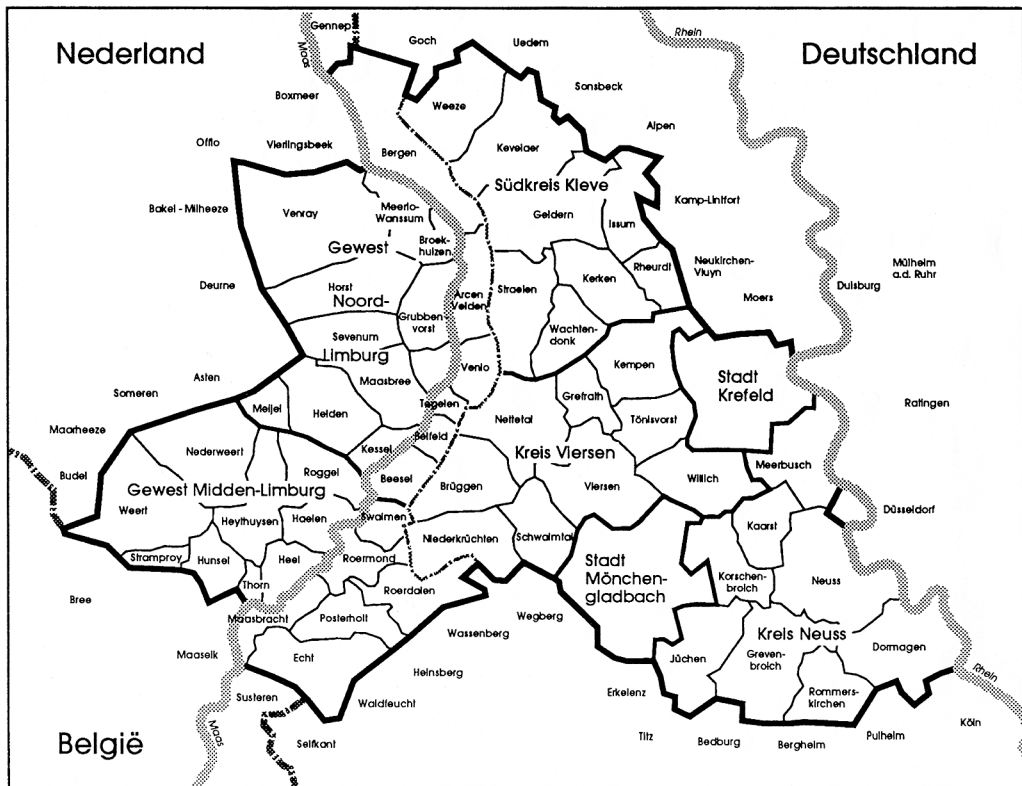
	2005200		911204		756280		337716	
	7.8	100.0	7.1	45.4	10.8	37.7	5.7	16.8
合計 (27)	747737		373868		224320		149549	
	2.9	100.0	2.9	50.0	3.2	30.0	2.5	20.0
	25748573.05		12782783.53		7006470.25		5959319.28	
	100.0	100.0	100.0	49.6	100.0	27.2	100.0	23.1

注：(1) 各措置 (Maßnahme) の上段は実数値 (ユーロ), 下段は負担割合 (%)。ただし左側は費用負担者ごとの措置別構成比, 右側は措置ごとの費用

- 負担者別構成比。実数値は原表の企画ごとの数値を措置別にまとめて集計し, この集計値から2種の構成比を算出した。
- (2) 2-1) の第4企画の地元負担額が18ユーロ過大計上されていると推定されているので, 原表数値を訂正した。また2-2) の第1企画の国および地元の負担額の合計が10ユーロ過小計上されていると推定されるので, 原表数値を訂正した。
- (3) 1-2) 交通移動・輸送・調達, 通信および3-2) 農業の画措置にかかる *ermn* の企画は, 2004年時点で無い。「国」 *Nationale Mittel* として一括計上されているので, NRW と NL の負担割合は判らない。
- (4) 同一資料の別表で, *ermn* にかかる 2004年末までに実施に移された企画数は27, これに対して支出が認可された EU 補助金は13030305ユーロで, 2001～2008年の補助金認可枠21428180ユーロの60.8%が消化されたとしている。

出所： *eurego, Bilanz 2004 INTERREG IIIA*, 2005, 15～23頁。

図 VIII-2 euregio 加盟自治体



出所：euregio, Documentatie/Dokumentation EUREX '96, 1996.

なお、2007年時点ではGennepが加わり、Noord-LimburgのMeijelとMidden-LimburgのNederweertが脱退している。Euregio, E.I.S. 2007, 32頁を参照。

手できるように、ネーデルラントとNRWの現状がデジタル化される。「国境を越えて広がる地域資料」企画で、ドイツとネーデルラントの自治体がデュセルドルフ行政区とリンビュルフ県庁と協力して、地域資料のデジタル化の手法を効率的に調整する。ネーデルラントとドイツに根を下ろした、*Großmärkte Straelen* や *Agropark Horst* のような商工業地区と農業経済面の展開、それにエウレギオの交通網模擬計画が調査対象となる。調査されたデータは、「一つにまとまった経済地帯としてのエウレギオ」*eine einheitliche euregionale Wirtschaftszone* を見通させるはずである。洪水のような災害時の最新の対策にとっても、この情報はきわめて重要である。当企画実施により、*ermn* の経済発展の可能性も明らかになる。当企画は、*EUREGIO* による大綱計画の一部である。

企画参加者：Bezirksregierung Düsseldorf, Gemeinde Roermond, Gemeinde Venlo, Gemeinde Venray, Gemeinde Weert, Kreis Viersen, Provinie Limburg, Rhein Kreis Neuss, Stadt Krefeld, Stadt Mönchengladbach, Südkreis Kleve

②ヨーロッパ横断道路網の拡充：A52/N280

ドイツとネーデルラントの政策を受けて、NRW 道路局とリンビュルフ県は N280-Oost [当時、ネーデルラントで A2 から分岐し東行する 280 号線はルールモント市北側を回り、国境前で切れていた] と A52 [デュセルドルフから西行する 52 号線は国境手前エルンプト *Elmpt* で切れていた] との接続の計画準備をともに始めることを決めた。両国間の手続き、業務方式が大きく隔たるにもかかわらず、統一的な環境適合性調査の準備のために共同の方法が開発された。国境を越える協力が成果を収めたため、予備計画と景観保全のための附随計画の作成の共同作業がこれに続くことになった。N280-Oost/A52 の接続の技術的計画とこれに付随する景観保全計画との作成は、リンビュルフ県を主委託者とする共同課題であった。A52/N280-Oost 接続実現のための企画は、国道 73 南、A74、N293 (ルールモント東バイパス)、N280-Oost の建設を予定するネーデルラントの総合交通対策 *VIA Limburg* の一部でもある。リンビュルフ中部 (ルールモント) とライン・ルール地域南部 (メンヘングラトバハ) との間の不連続部分を、片道 2 車線的高速道路でつなげることが計画されている [2009 年 11 月完成予定]。県の流動性計画はこの接続の実現の意義を強調している。そこでは N280-Oost/A52 の接続が地域的連絡道路として「最高級の質」の等級として挙げられている。これには道路の計画と建設とに特別に高い条件が課せられる。企画は 2003 年に終り、その成果とこれに続く諸計画が、5 月 12 日のフェンローでのシンポジウムで公開された。

企画参加者：Provincie Limburg, Straßenbau NRW

③共同で微細塵に立ち向かう：エウレギオの大気浄化のための革新的構想

国境を知らない大気汚染について、これまで微細塵と炭酸ガスによる負荷を交通制限によって減らそうと試みられてきたのに対し、*ermn* の 4 都市が他の解決方法を、すなわち、大気汚染を目的に適う植栽によって除き、大幅に減らすことを共同で研究する。その際、各市の重点が異なる。フェンローは植栽により微細塵を防ぐことを研究し、その成果がクレーフェルトの広範囲にわたる植林計画に好影響を及ぼすはずである。デュースブルクは都市化地域で緑地が果たす役割に対する認識を強めるための情報戦略を手がけ、ネイメーへは費用対効果分析およびこの分野での政策実践をもって寄与しようとしている。

企画参加者：Gemeente Nijmegen, [Gemeente] Venlo, Stadt Duisburg, Stadt Krefeld

①はデュセルドルフ行政区やリンビュルフ県も関わる、広域政策作成・実施のための基礎資料作成作業の一部である。当企画が地誌情報の精緻化と広報活動によって、*ermn* の自己認識を深めるかぎり凝集効果が期待される。しかし、既存の国家・行政境界を前提とする当企画は拡散効果も生み、よって両者が相殺しあい、結果として空間効果は中立的であろう。

②はあたかも国境を越える結節空間形成に向かう政策であるかのように見える。当時、

ermn 内の国境横断高速道路はフェンロー北側で接続する A67 [NL] /A40 [D] があるだけで、ルールモント北側を迂回する A280 [NL]（本企画で A でなく N となっている理由は不明）と A52 [D] とはつながっていなかった。たしかにこれの接続が、国境を挟む州（D）と県（NL）の経済的相互依存関係を強める面が認められるにしても、ただちに両者それぞれの領域空間としての一体性を弱めるわけでない。ましてやそれぞれの一小部分の結合でしかない *ermn* 空間に、凝集効果を生むことは期待できない。高速道路接続による国境の遮断機能の低下が、かえってエウレギオ空間に拡散効果を及ぼさないかとの疑問が残る。そもそも地元自治体等が費用を負担しない当企画に *ermn* が関わるのは、接続箇所がたまたま *ermn* 内にあるという理由だけからでないのか。

③は重点分野 3 に組み入れておかしくない企画であり、しかも事実上隣接 *ERW* の両都市と組んだ二つのエウレギオの共同企画である。国境だけでなく、エウレギオ間境界も越える大気汚染の防止対策では、個別エウレギオ単位の企画が適格的でないことを浮き彫りにする事例である。大気汚染という環境悪化を共有する意味で負の等質空間を対象にする空間政策は、国境ばかりでなく個別エウレギオの境界も相対化する結果をもたらし、よって *ermn* 空間に対し拡散効果を生むことが予想される。

ii) 重点分野 2：経済、技術、革新、観光（18 企画）

すでに述べたように、この重点分野の詳細は不明なので、企画名だけを表 VIII-13 に挙げる。

iii) 重点分野 3：環境、自然、景観（3 企画）

①国境を越える生態圏の保持

国立公園デ・メインウエフ *De Meinweg* (NL)、スワルメ近郊のスワルメ水郷 *Swalmenaue* (NL)、ニーダークリュヒテン-エルンプト *Niederkrüchten-Elmpt* 付近のエルンプト・シュバルム *Elmpt-Schwalm* 断層 (D)、自然保護地区であるブラハトの森 *Brachter Wald* (D)、ブリュゲン・ブラハト *Brüggen-Bracht* (D) の旧兵器庫跡地で、INTERREG IIIA による新しい自然体験地域が生まれている。本来一つの自然的まとまりをつくっていたのに国境による分断に悩む地域を再び結びつけるために、国境の両側の自然保護組織が結集した。湿地帯生態圏のような保護に値する生物空間が維持されなければならない。かつて集約農業に利用されていた土地あるいは軍事用地がこの企画に組み入れられ、自然に戻される。2002 年 5 月の企画開始以来、すでに無数の措置が講じられた。シュバルム溪谷の森では松科の代わりに元来この地域を特色づけた広葉樹が再び成長している。新しい林道が開かれた。フィーアゼンの企画参加者は旧兵器庫跡地の再自然化を目指して、ブラハトの森の土壤汚染を調査している。ドイツ、ネーデルラントの企画参加者の目的は、誰でもが立ち入ることのできる新しい自然保護地域の創出である。当企画は INTERREG 計画による資金でこの地域に向かって打ち出さ

表 VIII-13 重点分野 2：経済、技術、革新、観光の企画一覧

- 1 B2B-製品発見機：国境を越える取引引合いの検索
インターネットによる B2B 製品発見機で中小企業に業種を越える取引引合いを可能にする。
- 2 Crossart-現代美術の道
ニーダーライン・ネーデルラント国境地域の現代美術館の協力体制。景観と建築も対象にする。
- 3 あなたのための供給連鎖管理 (SCM)
中小企業にも SCM 利用を可能にする。
- 4 2-Land：魅力的な国境地帯景観の創造的、革新的な提供
両国チームが *ermn* への日帰り・週末旅行の対象提供範囲を拡充する。
- 5 未来への一歩：エウレギオにおける RFID によるプロセス最適化
倉庫在庫やトラック積み荷の内容を無線周波数 (Radio-Frequency Identification) により自動的に同定する技術を中小企業にも導入することを探る, RFID NRW-NL 企画の一環。
- 6 エウレギオ塗装ネット
ニーダーラインとリンビュルフ県の 800 塗装企業に助言を行う。
- 7 エウレギオの起業家支援：企業設立者のためにすべてをまとめて
「エウレギオ起業家支援」*Euregionale Gründer-Initiative* (EGI) はエウレギオ域内市場向けの若い起業家を支援する。
- 8 弾性に富む粉のヨーロッパセンター：古ゴム問題の新しい解決
スポーツ競技場の表層や燃料としてしか使われなかった古ゴムを高価値の原料として再利用する。
- 9 航空基地フェンローで歴史を発見する
徒歩・自転車旅行者のために旧軍用基地周辺の歴史を辿ることを容易にする。
- 10 食品・飼料企業の国境を越える品質保証
消費者保護のために両国の専門家チームが、空白のない生産経歴保証, HACCP (Hazard Analysis Critical Control Point), サルモネラ菌対策について研究, 開発する。
- 11 青果生産・流通の国境を越える品質保証制度
ermn と *ERW* の青果生産・出荷の全企業に対し, 品質保証制度の国境を越える調整と改善を目的とする。現行の取引・出荷経路の情報交換の最適化を, 当地域で最重要の果菜 (実), トマトとリンゴに対して行う。
- 12 IBIS：エウレギオ企業のために革新的風土の改善
中小企業の組織革新を推進する。
- 13 北運河 *Nordkanal* の農村美術
Euroga 2000plus の灯台企画で, 北運河を価値の高い農村美術として, その歴史的遺跡の全体を体験できるように, 旧運河の跡沿いに徒歩・自転車旅行を可能にする。
- 14 *ermn* のメディアの教育推進施策
印刷とメディアの国境を越えて拡がる協力網を作り上げ, 両分野の教育・労働市場の相互交流度を高め, *euregio* はメディア拠点を打ち出す。
- 15 北運河
ermn を横断してリンビュルフにいたる 100km の旧北運河跡を旅行ルートとする。
- 16 マウスのクリックでエウレギオを駆け抜ける：国境を越える自転車旅行
ドイツとネーデルラントの現存の道路網を結ぶ約 20 の新しい連絡路が, 自転車旅行者のために整備される。そのためのホテル一覧が刊行され, フィーアゼン, クレーフェ両郡が協力してインターネットプラットフォームによる二ヶ国語の旅行代理店を立ち上げた。
- 17 危険を克服する：危機に備えて調整を改善
国境を越えて最適に調整された, 現代的な早期警告体制が家畜感染症による経済的打撃を軽減する。農家が将来の危機によく備えられるように, 効果的な手法を開発, 試行する。
- 18 マース・シュバルム・ネテ湿地生態圏の一体化
危機に瀕している水生動植物の生存圏を拡大し, マース・シュバルム・ネテ自然公園の生態圏としての一体化を妨げている要因を除去する。

注：13 と 15 は事実上同様の企画であるにも拘わらず別個の企画として採用された理由は, 企画内容の詳細が不明なので判らない。

出所：表 VIII-11 に同じ。

れた、エウレギオ次元の環境観念を実現するものである。

企画参加者： Gemeente Roerdalen, Gemeente Roermond, Gemeente Swalmen, Kreis Viersen, NRW-Stiftung, Provincie Limburg, Rijkswaterstraat, Staatsbosbeheer

②自然の魅力：国境公園 *Maas-Schwalm-Nette*

自然公園マース・シュバルム・ネテではドイツとネーデルラントの協力がすでに長い伝統を持つ。「映像によるマース・シュバルム・ネテ」企画の枠組みでドイツ・ネーデルラント来訪者センターの活動がさらに拡充され、国際的自然公園はより多くの生命に満たされる。これの目的は、この公園のかけがえのない自然と景観の価値に対する認識を深めることにある。当自然公園における自然と景観の多様性と見事さについての情報が整備され、より多くの観光客をこの地域に引き寄せるために、持続的近隣地保養の可能性が宣伝される。詳細なパンフレット資料が魅力的な遠出と日帰り旅行に誘う。同時に、この地域の住民にかけがえのない景観の楽園に住んでいることを、またその維持に対策が必要であることも認識してもらなければならない。自然公園に関する巡回展示会、来訪者情報センターの国境を越えて広がるネットワーク、毎年国境を跨ぐ「樹木の日」を設けること、学校での環境授業のための教材の開発と導入、毎年の行事予定一覧と小冊子が、当公園をより広く知らせることになろう。

企画参加者： Deutsch-Niederländischer Naturpark Maas-Schwalm-Nette, IVN Consulentenschap Limburg, Naturpark Schwarm-Nette, Regio Noord- en Midden-Limburg, Staatsbosbeheer Regio Limburg-Oost-Brabant

③ LOEWE-GIS：国境を越える水防

水は国境を知らないために、国境を越える協力がこの分野でとくに重要である。*LOEWE-GIS* 企画の枠組みは農民がその農地と地下水を保全し、「ヨーロッパの水」枠組み指針にしたがい、しかし同時に経営上も収益を確保できるように、農民の新しいコンピュータ利用を助けるものである。この名称がすでに企画内容を示唆している。*LOEWE* とは、「*ermn* における経営の持続保証と水の保全のための農業の最適化」*Landwirtschaftliche Optimierung zur Existenzsicherung der Betriebe und Wasserschutz in der euregio-rmn* の意味であり、*GIS* とは「地勢情報システム」*Geo-Informationssystem*、空間関係データの加工のためのコンピュータに基づく情報システムの意味である。

GIS 計画は、農業・園芸用地の利用と地下水の質との相互作用に関する多くの情報を処理するのに役立つ。そのために国境の両側の特定の地域で、必要な農業、水理学、土壌学、気候に関する必要データが採集され、吟味され、評価される。当企画の成果は、農業、水利経済の助言機関における情報、判断の基準として役立つ。企画参加者は *LOEWE-GIS* コンピュータ利用の実施により、助言の水準を改善するばかりでなく、とくに国境を越える継続的な

専門的交流を目指す。

企画参加者：Kreis Kleve Veterinärverwaltung, Kreis Viersen, Limburgse Land- en Tuinbouwbond (LLTB), Niederrhein Wasser GmbH, Niersverband, Provincie Limburg, Rhein Kreis Neuss, Stadtwerke Nettetal GmbH, SWK Aqua GmbH, Wasserwerk Willich GmbH, Waterleiding Maatschappij Limburg (WML)

当重点分野の3企画は、いずれも自然環境面における等質空間に準拠する政策である。とくに①と②は *ermn* に固有の自然環境条件に取り組むものであり、よって凝集効果が見込まれる。自然空間の等質性が自然自体の自己再生産力だけでなく、人為との相互作用によって維持される以上、その人為をエウレギオで国境を越える相互協力として制度化することが、自然環境的等質空間を地域化する効果を持つはずだからである。それが観光業の発達を促すことも期待されているならば、さらに自然空間を経済空間に転化する展望も開けよう。

他方で③について、その空間効果は二面的である。表層水であろうと地下水であろうと水系も等質空間形成因になるので、その保全のための協力は一方でエウレギオ空間の凝集性を強めるであろう。しかし他方で、水系域とエウレギオ領域とが相互に独立した空間枠である以上、個別エウレギオの地域政策が前者に指向すれば必然的に政策対象がエウレギオ境界を越え、よってエウレギオ空間に対して拡散効果をもたらすことが避けがたい。後出の歴史・文化空間と同じく、自然空間であっても一般に等質空間を局地的地域政策の準拠枠とするのは諸刃の剣である。

iv) 重点分野4：資格教育・労働市場（8企画）

① IT アカデミー・ライン・マース・ノルト

ermn の企業の多くが情報・通信経済分野の人材を求めている。「IT アカデミー・ライン・マース・ノルト構想」の企画は、高度の資格を附与する短期教育の具体化のために手がかりを得ることを狙って策定された。申請された1年間の構想具体化の過程で、将来IT アカデミー・ライン・マース・ノルトの発足を実現するために、基礎的な企画策定作業が遂行された。

企画参加者：Fontys Hogescholen, Gemeente Venlo, Hochschule Niederrhein, IHK Mittlerer Niederrhein, IWFHN, Kamer van Koophandel Limburg Noord, Stadt Krefeld

②隣国での職業教育：エウレギオならではの好機をつかむ

国境の向う側を覗くことは職業教育の分野でも役立つのであり、*ermn* のドイツ側域で職業教育施設が不足しているのを補うために、「エウレギオの職業教育施設取引所」開設が要望された。当企画は若者と技能者にネーデルラント、とくにフェンローとルールモントにおける複線式（学校・実習）と単線式（学校）の職業教育の情報を伝えるものである。ネーデルラ

ントで教育を受けるに必要な前提条件と費用に関する専門的な助言により、また個別教育施設への具体的仲介により、ドイツの若者が職業教育を受けられるように手助けをする。他方でネーデルラントの若者をドイツ企業での実習に誘い、助言する。これまで溶接工、めがね職人、支店責任者という多岐にわたる職業分野に対して42件の申し込みがあった。

企画参加者：Kreis Kleve, Kreis Viersen, Kreispolizeibehörde Kleve, Kreispolizeibehörde Viersen, Politie Limburg-Noord, Polizei Krefeld, Polizei Mönchengladbach, RAV Limburg Noord, Rhein Kreis Neuss, Stadt Krefeld, Stadt Mönchengladbach

③ *ermn*：北海とルール地域との間の工業・物流の回転盤

1995年以来再びケンペン *Kempen* の職業学校がネーデルラントの相手方フェンローの職業組合と組み、共同の学校計画を軌道に乗せることができた。今回は輸送・物流分野での授業計画が対象である。目的は国境の両側で認証される特別の受講修了証明書への導入にある。輸送分野は、一体化が進むヨーロッパで国境を越える性格を強める一方である。学校教育の内容もこれを考慮に入れなければならない。この観点に立ち、新学年度からフェンローとロベリヒ *Lobberich*（ネテタール北郊）の生徒各20人が *ermn* 内の最適の貨物輸送方法を共同で探り、その作業成果を公表することになっている。

企画参加者：Berufskolleg Kempen, Gilde Opleideingen Venlo, Kreis Viersen

④労働市場向きの一般教育と準備のエウレギオ化

現地語能力と現地知識とを具える労働者が、*ermn* のあらゆる資格分野で求められている。この需要に応えるために、クレーフェルトとフェンローの二つの学校が密接な協力を始めた。もって両国の若者が異文化対応能力を身につけ、相互間で開放的態度をとることができるようにである。かれらは「隣国の」教育制度と労働市場について学ぶ。これまで隣国の言語が不得意だったことが決定的障害であった。というのもまさにエウレギオ域内に相互交流のための多数の足がかりがあるからだ。当企画の目的は、全科目の基準をエウレギオ住民の自覚を生みだすものにする、たとえば歴史では共通の経路を遡り、国語（ドイツ語・ネーデルラント語）では作者間の民族を超える影響を、ゆえに相互間の文化的影響を明らかにすることにある。ネーデルラント語もしくはドイツ語が多くの科目の中でも必須科目として、またバイリンガルのための外国語として重視される。新しい媒体が企画参加者と学校の間の意思伝達の基本的な手段になる。両校ともその授業計画がつとにこの革新的方向に進み始めている。当企画は2004年に「ヨーロッパ言語章標」を受賞した。

企画参加者：Stadt Krefeld, Städtische Gesamtschule Krefeld, Valuascollege Venlo

⑤エウレギオの労働市場に合わせる：隣国での 2 週間の企業実習

国境の向こう側ではどうやっているのかをこの眼で確かめてみる機会が、いまやネーデルラントとドイツの手工業見習い *Auszubildende* と若い職人 *Fachkräfte* に与えられる。“euregiofit” の枠組みでかれらは隣国で 2 週間の企業実習を修了できる。当企画は手工業でまだ不十分な人の流動性を強めるために、その全領域を対象にしている。語学上の、また異文化体験に向かう準備と経営側の準備とのための演習が、この在外実習を実りあるものにする。

企画参加者：Niederrheinische Kreishandwerkerschaft Krefeld-Viersen, ROC Gilde Opleidingen

⑥エウレギオで国境抜きの爽快 *Wohlbefinden* を：壮健 *Wellness* のための国境を越える教育

一息つき、たっぷり楽しむためには、適正な環境と、その仕事に向いていると自ら思う人々によるこまやかな手当てを必要とする。そのため *ermn* に新しい、興味深い労働市場が成長する。この市場向けに、*Wellfit* 企画はドイツとネーデルラントの見習いを養成することを目指す。国境を越える教育により、若者が美容、栄養、休養の分野で顧客に助言し、美容分野の多岐にわたる措置を施す術を学ぶ。

企画参加者：Gilde Opleidingen Roermond, Thinkhouse Mönchengladbach

⑦国境を越える職場紹介：エウレギオのジョブロボットがこれを可能にする

ドイツとネーデルラントの職業紹介所にとり、隣国の企業の求人を探し出し、求職者に隣国の職場を斡旋してやることはこれまで難しかった。これが今や変わることになる。インターネットによる探索機器「エウレギオ職探しロボット」の助けを借りて、求人が一目で判り、仲介機関に向かうことができるようになる。企画実施期間中ドイツとネーデルラントの職業仲介者は職探しロボットを実際に使ってみて、その結果次第でこれを恒常的に利用に供することを決める。当企画の目的は、この「職探しロボット」により、国境を越える仲介を少なくとも 80 件増やすことにある。

企画参加者：Agentur für Arbeit Viersen, CWI Venlo, Euregio Rhein-Waal, Provincie Limburg, Stadt Kleve

⑧国境を越える物流の資格教育が失業者に再び機会を与える

2 か月間の実習を含む 14 か月の資格教育の導入が、当企画の目的である。これは重要な一経済部門〔物流部門〕の欠陥と障害の除去に役立つはずである。試行的企画で企画参加者は互いに調整しあいながら、国境を越えて実施され、相互に認証される資格附与基準を開発した。修了試験に合格した参加者に *ermn* 全域で認証される修了証書が交附された。教科課程はとりわけこれにふさわしい教育・職業観を具える失業者を想定していた。資格教育課程の

学修者は、ネーデルラント語もしくはドイツ語の基礎と物流・フォークリフト運転の専門科目を習うことができ、また実習に必要な包括的な電算機授業も受けた。ドイツ・ネーデルラント労働市場向きの指導は1カ月、求職活動訓練は2か月続く。これに続く2か月の実習期間中、学修者は習得した知識を使い、企業で当該業務の流れを習得することができた。失業中の学修者はこれに続く求職活動に際し、同じように支援を受けた。

企画参加者：Arbeitsamt Mönchengladbach, Gemeente Venlo, Gilde BT Contracting, Technologiezentrum Glehn GmbH, TÜV Akademie Rheinland

労働にかかる分野は経済分野の一部をなすにも拘わらず、前者が後者と並ぶ「重点分野」として別建てになっていることは、*ermn* にとり労働市場の拡充が格別の経済的重要性を持つことを物語る。とくに不熟練労働者、失業者、若手労働者の就業機会を増やすための国境を越える労働市場形成政策は、エウレギオ空間に凝集効果を生むであろう。8企画のうち、①、②、④、⑤、⑥の5企画はそのようなものとみなしうる。他方で③、⑦、⑧はそれぞれ問題を孕んでいるように思われる。

③は北海「ラントスタット」とライン・ルール地域の間の物流の回転盤としての労働市場の形成を謳い、*ermn* 空間を「回転盤」に擬制しているかぎりでは凝集効果が期待できるかもしれない。しかし、クレーフェルト、メンヘングラトバハ、フェンローによる三角地域であるケンペン地域 *Kempener Land* がライン、マース両河の間に位置するといえ、ロベリヒはマース河を挟んでフェンローの向かい側にある町である。よって当企画が対象とする物流軸が *ermn* 全域でなく、マース河流域を空間的準拠枠としていることは否みがたい。それは *ermn* 空間内に働くそれぞれライン、マース両河に向く逆向きのベクトルの伏在を表面化することになり、よって拡散効果をもたらす可能性を生むことにならないか。おそらくそれを意識してか、企画名にあえて「北海とルール地域の間」を謳ったのであろう。しかし、これはこれでマース流域が広義の「ルール地域」に含まれるという認識を潜ませる標語となり、ネーデルラント側が受け入れ難いはずの企画名がなぜ採用されたのか、疑問が残る。もしも、ネーデルラント側にとり北海に沿う地域、ラントスタットこそ最重要視されるべき自国の経済空間であるとしても、*ermn* のマース河流域が広義のライン・ルール地域に包摂されているとの認識を容認しているとすれば、それはそれでライン河下流域経済空間の現実の範囲を示唆するものかもしれない。

⑦で隣国の職場紹介の実を上げようとするならば、*ermn* 内に限定することが目的に適うのだろうか。たしかにまずは最近接の地域で試行するという段取りを踏むことが現実的なやり方かもしれない。とはいえ、次第に相互に国境を越えた労働市場をできるだけ広く紹介し合うことが最終目的として掲げられるべきであろう。したがって、労働市場形成政策は個別エウレギオの単独企画でなく、複数のエウレギオが連携して共同企画にすることが目的に適う。

事実、当企画に隣接 *ERW* も企画参加者として名を連ねており、これは *ermn* を越える広域企画となっている。⑧も広域機関が企画参加者に名を連ねている点で⑦と同様である。国境を越える労働市場形成を個別エウレギオ領域に限定することは、起点として意義があっても、目的にはなじまない。総じて労働市場形成政策はエウレギオの境界を越える方向性を秘めており、よって長期的拡散効果により短期的凝集効果が弱められる恐れがあることを留意する必要がある。

v) 重点分野 5：社会・文化的統合（15 企画）

① EIS 企画：潜在的投資家のための構造関連データ

「エウレギオ情報サービス」*EIS : Euregio Informationsservice* は、インターネットに基づくデータバンクの統計資料を誰にでも利用可能にして、潜在的投資家に *ermn* の経済発展のための構造関連情報を提供することを目的とする。*EIS* は社会経済統計を拡充、統一し、*ermn* 全域の重要な地域内変動傾向を定期的、継続的に把握する。EU の INTERREG VI A（2007～2013）と「ヨーロッパ革新得点表示」*European Innovation Scoreboard* の方針にしたがい、*EIS* の把握は「連続指標」*Kontextindikatoren* と「革新指標」*Innovationsindikatoren* とに集中する。その際、*ermn* 内の関連、すなわち経済部門の特化と水準、労働力流動性と雇用に焦点が当てられる。なかでも最も難しい課題は *ermn* 内の革新の可能性の把握にある。

企画参加者：AGIT (Aachener Gesellschaft für Innovation und Technologietransfer), Provincie Limburg

②記憶の蘇生：マース、ライン両河間の時間の旅

ermn 内の 5 博物館が国境両側地域の歴史をたどる旅に来館者、観光客、生徒たちを誘う。博物館は「時を超える仮想の旅行社」として機能し、共通の歴史を人々の意識の中に刻みつけたいと願っている。リンビュルフの湿原地域デ・ペール *De Peel* とライン河の間の地域は、数世紀にわたり政治的にも文化的にも「一つのまとまり」*eine Einheit* をなしていた。入館者は「時の旅人」であるかのように、複数の媒体による展示、仮想・実像表示により地域と歴史に案内される。参加博物館の相互協力の最終目標は、博物館技術、マーケティング、文化教育の領域での協力体制の構築にあり、これには *ermn* 内の他の文化史博物館も関わることを目指されている。

企画参加者：Limburgs Museum (Venlo), Museum Schloss Rheydt (企画責任者), Museum de Loch Mederslo (Noord-Limburg), Museum Burg Linn (Krefeld), Rheinisches Schützenmuseum Neuss

③健康フォーラム

システムの違い、融通のきかない手続きが隣国の医者にかかることを妨げている。国境の障壁、病院、専門医の国境を越える協力の不全もこれに加わる。したがって国境を越える交流が医療サービス改善の鍵となる。この問題に取り組むのが当企画である。エウレギオ内の医師、病院、健康保険組合、薬剤師の協力が重要な信頼感の基盤を創りだし、知識の交換をもたらすはずである。患者、医師、病院のために、行政上も医療内容も改善と簡素化が目指されている。患者が自ら、専門医、病院、健康保険者について望ましいサービス内容を調べることができるように、すべてのデータが単一の健康ポータルに登録される。サービス提供者側も、需要、隘路、受け入れ能力、相談者に関する情報が改善されるので利益を受けることになる。

企画参加者：「総合地域健康保険ラインラント」AOK Rheinland, 薬剤師, 医師, 健康保険組合, 病院

④HERMAN：国境を越える災害救助の最適化

火災、洪水、高速道路上の重大事故から *ermn* 市民を守るために、「*ermn* の救助活動」*Hilfeleistung in der euregio rhein-maas-nord* (HERMAN) なる企画が策定された。消防、警察、救助活動の国境を越える協力の最適化のための第一歩は、一見単純な、しかし重要なこと、すなわち互いに知り合い、データを交換し合い、災害発生時に隣人がどのように措置を講ずるかを学ぶことである。続いて国境を越える協力により、負傷者にいっそう迅速な手当てを施し、救急病院に搬送することができるようにするための具体的企画が策定される。最後に、HERMAN 企画の参加者は、緊急時にすべての関係者がいち早く、国境を越えて災害を把握できるようなシステムを開発する。

この企画項目に参加者の記載が欠けている。

⑤若者を寛容に向ける

外国人への敵意、ゲットー化、多元社会、これらのテーマが *ermn* の人びとの関心の的である。ここで若者が決定的な役割を演ずる。今後とも民主的な対立解決が可能になるように、彼らはもっと責任を負わなければならない。アンネ・フランクの人生を伝えるゲルデルン、クレーフェルト、フェンローでの視聴覚展覧会は、エウレギオの若者たちを重要な社会的対立問題に向き合わせることを狙っている。この展覧会の主催者はベルリーンのアンネ・フランク・センターである。この主題にかかるセミナー、討議、朗読会のための多彩な企画が、エウレギオ全域での巡回展覧会と同時に開催される。一連の催事の頂点は「企画市」の「寛容と民主主義のための強さ」と「理解の夜」である。

企画参加者：Anne Frank Zentrum Berlin e.V., Gemeente Venlo, NS-Dokumentations-

zentrum “Villa Merländer”, Stadt Geldern, Stadt Krefeld

⑥光る壁画：ermn のガラス彩画

ラインとマースに挟まれた地域、とくにニーダーラインは、20 世紀のガラス彩画芸術作品のヨーロッパでも例を見ない集積と品質とを誇っている。これらの作品群は当地域の文化遺産の重要な構成要素をなす。当企画は初めて全ガラス彩画を調査し、芸術史的評価とともに記録する。ガラス彩画に親しむための判断基準が開発され、優れたガラス彩画芸術を文化観光の目的に仕立てあげる。現代のガラス彩画は比較的新しい芸術であるにも拘わらず、その保存が危ぶまれている。壊れやすく、建築に付随する芸術であるために流行に左右されるからである。いくつかのガラス彩画は有害な環境物質に浸蝕されて、すでにその図柄が消えている。多くのガラス彩画が、戦争、改築、解体、蛮行、理解不足のために失われてしまった。この企画をはずみとしてガラス彩画への理解を深め、永く後世に伝えるための基礎条件を整えることが当企画の目的である。

企画参加者：Bisdom Roermond, Bistum Aachen, Stichting Wetenschapsinstituut 20e Eeuw, Stiftung Forschungsstelle Glasmalerei 20 Jh. E.V.

⑦時間と国境を越えて対話する人間と教会

かつて単一の文化・経済地域にあった 3 自治体、「白い都市」トルン *Thorn* [NL]、ビクラートベルク *Wickrathberg* [D]、ライト *Rheydt* [D] がそれぞれの文化財を国境を跨ぐ企画に役立てる。企画参加者は協力して、共同の余暇計画によりその文化的、観光地としての魅力を高めようとする。最近 INTERREG 資金で修復されたばかりの両教会が、文化を現代にふさわしいやり方でなじみやすくし、共同の文化史的遺産への自覚を高めるための基礎となる。文化計画は「音楽祭」、「音楽と文学」、「信仰の歴史にかかる講演会」、「芸術と教会空間のフォーラム」、「資料館と家族年代記」、出版、史蹟公開の日に参加するなど多岐にわたる。2001～06 年の企画実施期間中 105 の催事が予定されている。一つになるヨーロッパを背景に、この企画は文化史的にかつて単一の生活圏をなしていた地域の人々と教会を、時間と国境を越える対話に引きこむことにより、持続的に、国境を越えて、効果的に作用を及ぼすことを目指す。

企画参加者：Evangelische Kirchengemeinde Rheydt, Evangelische Kirchengemeinde Wickrathberg, Gemeente Thorn, Regio Noord- en Midden-Limburg

⑧測定し、評価し、改善する：高齢者施設の質の管理

この企画で、養老施設と介護施設が経験を交換し合い、エウレギオ内の利用者、費用負担者、施設提供者のために、介護の質を評価し、改善するための比較可能な基準を開発する。

「地域のヨーロッパ」の再検討（6）

企画参加者は介護当事者たちの権限の一層の拡大をもくろむ。介護措置が指標により評価され、これによって介護を必要としている人々のための質の水準の具体的改善が可能になる。まず専門的、経営的データが共同のデータベースで把握される。これらを共通基準の解りやすく定義された指標に基づき、実施者が評価する。新しい知見とともに、企画参加者は質の優位を認識し、拡張する見通しを立てる。「優れた解決から学ぶ」という意味で、他の施設やサービス提供者もこの共通基盤を利用できる。

企画参加者：Altenheime der Stadt Mönchengladbach GmbH, Institut Arbeit und Technik, Zoerggroup Noord Limburg

⑨若者のためのプロイセンの遺徳：ゲルデルン征服 300 周年記念展覧会

300 年前にゲルデルン市とかつてのゲルデルン公国領域の大部分がプロイセンに占領され、その結果ゲルデルン市は以後 100 年にわたり首都の役割を演じた³⁾。この 300 周年にあたり、ニーダーラインとネーデルラントの国境地帯におけるプロイセン史の「偉大な時代」を思い起こす展覧会が企画され、ベンラーイ [NL] とノイキルヘン-フルイン *Neukirchen-Vluyn* [D] との間、またアフエルデ *Afferden* [NL] とフィーアゼン [D] との間の地域の住民が、その地域的一体性と同質性を失うことなく新しい影響を己のために役立たせることを示す。展覧会はケーフェラルのニーダーライン民俗・文化史博物館、ついでバーゼルのプロイセン博物館、続いてネーデルラントでベンラーイのフレウレクスフース博物館で開催された。講演と案内、歴史的現場への訪問は展示物の説得力を強め、このヨーロッパ文化空間への関心を呼び起こすことができた。

企画参加者：Museum Freulekushuus (Venray), Gemeente Venray, Gemeentearchief, Mespils, Niederrheinisches Museum für Volkskunde und Kulturgeschichte (Kevelaer), Preußen-Museum NRW (Wesel), Stadtarchiv Geldern, Stichting Historie Peel-Maas-Niersgebied

⑩「ケセル伯の年」二つの都市の根

共通の歴史的根元に結びつくために、グレーフェンブローホ [D：メンヘングラトバハの東南] とケセル [NL：ルールモントとフェンローの中間、マース河左岸] の両都市が 2005 年に「ケセル伯の年」を組織した⁴⁾。射撃・市民団体の会合、写真展、余暇活動、地域市場が数千人を呼びこんだ。この「人から人へ」の企画により、長期にわたる協力のための礎石が据えられた。

企画参加者：Stadt Grevenbroich, [Gemeente Kessel]（後者は欠落しているが、書き落としと推認される）

⑪対話のオーケストラ－舞台上の若者たち

クレフェルト、メンヘングラトバハとフェンロー、ルールモントの音楽学校、その他のエウレギオ内の自治体の協力で、ニーダーライン交響楽団は 60 年前の終戦の記念のために若者のオーケストラ企画「対話するオーケストラ」を平和のしるしとなし、国境を越える思考と行動を強めることを目指す。企画の狙いはともに音楽を奏でることが対話を促し、広めるはずということにある。目的はエウレギオの若者たちを同一の音楽世界に投げ込み、彼らを職業オーケストラの楽団員たちに交えて舞台に上らせることにある。加えてこの企画は、当地域の音楽学校とニーダーライン交響楽団との多岐にわたる協力を促すはずである。

企画参加者：Kunstencentrum Venlo, Vereinigte Städtische Bühnen Krefeld und Mönchengladbach

⑫エウレギオのための「声」

ニーダーラインの歴史的価値の高い城館、城塞、宮殿で初めて、グレゴリオ聖歌、モンテベルディの合唱曲、ドイツ・ロマン派のリート、オペラのアリア、近代歌曲、現代音楽の声を演奏することが企画された。その際、マース、ライン両河の間の歴史的地域に散在する城館、城塞の地理的、歴史的連続性を、すぐれて感覚的、具体的に体験させることが、演奏会の前提として理想的である。今年の 9～10 月の 6 回の全週末にすばらしい歌声の音楽行事が開催される。地理的、時間的順序に従い、音楽愛好者が演奏会場をめぐり、またエウレギオの公園と建築物の案内も利用できるように演奏会が組織される。そのため通しの週末利用券が各地域の旅行業者、主催者、芸術監督の協力のもとに、市の販売代理店により提供される。これも「人から人へ」企画の一環である。

企画参加者：Geldersch Landschap en Geldersche Kasteelen, Generalkonsulat des Königsreichs der Niederlande, Kulturraum Niederrhein e.V., Provincie Gelderland, Provincie Limburg, Stichting Oude Muziek Brabant, Stichting Oude Muziek De Grafschap

⑬ルールモントの三つの世界選手権

ルールモントの Jo-Gerris 体育館の障害者バレーボールの三つの世界選手権に、*ermn* から 28 チームが参加する。男子車椅子バレーボールとともに、女子車椅子バレーボール、男子義肢バレーボールの世界選手権チームが決まる。「人から人へ」企画の身障者バレーボール世界選手権の目的は、身体障害にも拘らず難儀度の高いスポーツが可能であること、身障者が社会の対等な一員であることを若者たちに示すことにある。約 1000 人のドイツ、ネーデルラントの生徒と教師の参加が見込まれ、かれらは世界選手権の組織的運営に協力してくれるはずである。加えてルールモント高齢者協会とメンヘングラトバハ高齢者集団を通して、約 50 人の高齢者が組織活動のさまざまな部面に投入される。大会周知のために企画参加者が連携し

て、三ヶ国語の小冊子のほかに、ポスター、プログラム集、横断幕、旗を準備し、インターネットサイトが定期的に最新情報に更新される。

企画参加者： Gemeente Roermond, Stadt Mönchengladbach, Stichting Promotie gehand-captensport Nederland

⑭ルール・マインベーク Rur/Meinweg 地域の休養と観光

バセンベルク *Wassenberg* [D] とルールダーレ *Roerdalen* [NL] の両自治体はスポーツと文化を組み合わせ、景観上の魅力を訴求し観光客の誘致を図ろうとする。間もなくバセンベルクを抜け、ルール *Rur/Roer* 川沿いに国境を越える約 30km の経路を観光客と地元住民が自転車旅行で楽しむことができるようになる。オブホーフエン *Obhoven* [D]、エフェルト *Effeld* [D]、ビルゲレン *Birgelen* [D] を抜け、国境を越えてネーデルラント側のルールダーレ方向へ進み、そこからバセンベルクに向かって戻る。途中いたところで、演芸場、曲芸、寸劇などの劇場演芸が楽しませてくれる。バセンベルク市の「芸術・文化の日」も拡充され、いずれ芸術家がネーデルラント国境地域の大部分に動員されることになろう。この日は毎年ルールダーレと交互に開かれる。この「人から人へ」企画で、スポーツ好きに魅力的なルール・マインベーク地域が道標つきのノルディック・歩行経路として提供される。

企画参加者： Ambt Montfort, Gemeente Roerdalen, Stadt Wassenberg

⑮世界音楽が結ぶ

グローバリ化という現象が現実になってからはじめて、他文化の音楽への関心が芽生えた。ネーデルラントではつとに世界各地から来た音楽家が活動しているのに、多彩な音楽文化を誇る古典的な「音楽の国」ドイツは、今ようやく世界音楽からの刺激を受け入れ始めたばかりである。そこでエウレギオとして共通の体質を育てることが考えられる。それゆえ、メンヘングラトバハの BIS センターとルールモントの CK 劇場が共同の「人から人へ」企画として、本年 9 月より世界音楽のさまざまな演奏会を公演する。

企画参加者： BIS-Zentrum (Mönchengladbach), Centrum voor de Kunsten (Roermond)

以上 15 企画は 3 群に分けることができよう。まず、①、③、④、⑥、⑧、⑪、⑭の 7 企画は、国境を越える協力により *ermn* 空間に新しい文化的等質性を生みだし、もってこれの一体性＝地域化を強めようとするものである。これらは文化面での空間形成政策であり、概して凝集効果をもたらすことが予想される。このうち⑥は、「ガラス彩画」という文化遺産の分布を空間的準拠枠とするので過去への回帰のように見えるかもしれない。しかし、これはまだ一般にその価値が十分に認識されていない現代美術としてのガラス彩画を文化財として新たに発見し、その保存活動を通して新しい文化空間形成の展望を開こうとする積極的空間政

策である。ただし、ニーダーライン全域が対象になるかぎり、エウレギオ空間に凝集効果よりむしろ拡散効果を生む可能性が強い。逆に②, ⑦, ⑨, ⑩, ⑫の5企画は、歴史的文化空間を準拠枠としてこれの再生を図ることにより、*ermn*の文化的一体性を発掘しようとするものである。これは後述のように大きな問題を孕んでいると思われるが、さしあたりこの点の指摘のみにとどめる。残る⑤, ⑬, ⑮の3企画は、空間政策としての意義をさほど認められない。とくに若者を対象にしたこのような催事への共同参加を通じて、国境を越える人々の交流の機会が増えれば、たしかに国境の分断作用を減じる効果が多少生まれるかもしれない。しかし、それが*ermn*空間の凝集効果を上げることはまず期待できない。このような企画はむしろ、INTERREGの政策意図とエウレギオの存在意義との微妙なずれを露呈するように思われる。

重点分野5でとりわけ地元自治体等の負担比率が相対的に高いことをすでに述べた。平均負担率は27.7%であり、これを超えるのは③, ④, ⑨, ⑩, ⑪, ⑬, ⑭, ⑮の8企画で、第一群に属するのが4, 第二群が2, 第三群が2という分布で、偏りは認められない。それでは、総じてこの重点分野で地元自治体等の積極性が目立つのはなぜかが、あらためて問われる。すると、この地域、*ermn*だけでなく*ERW*をも合わせた空間のドイツ側域、いわゆる「ニーダーライン」*Niederrhein*と呼ばれる地域の歴史的文化空間が、地域性というよりもむしろ局域性の混在ともいべき特性を具えていなかったか、という問が誘発される。そこで以下、「ニーダーライン」という広域概念について立ち入った検討を施すことにする。

3) 「ニーダーライン」の概念規定と空間特性

「ニーダーライン」概念を検討するにあたりとりわけ参考になるのは、これに地理的、歴史的観点から多面的に再検討を加えたおそらく最新の成果と思われる *Geuenich* 編の論文集である⁵⁾。以下、これに依って「ニーダーライン」の文化空間的特性を把握したい。

i) 「ニーダーライン」の概念規定

まず社会・経済地理学者 *Blotevogel* によれば、ラインラント北部、すなわちボン以北の自然空間的編成は二つの大きな景観 *Landschaft* に分けられる。レス境界 *Lößgrenze* の南がニーダーライン湾状地 *Niederrheinische (Kölner) Bucht*, 北がニーダーライン低地 *Niederrheinisches Tiefland* である。今日の地域政策の枠組における計画空間としての「ニーダーライン」は、たとえば、NRWが*Natur 2000 Programm*で行政的観点も加味して州内を8の大景観域に分けたときのその一つ、*Niederrhein*は、ニーダーライン低地にほかならない。そもそも地理学用語に*Landschaft Niederrhein*はなく、ふつう不正確に「ニーダーライン」と呼ばれるものは、地理学で「ニーダーライン低地」とされるものなのである。しかも、この自然空間単位は一連の共通の景観指標で特徴づけられるといえ、自然空間上の諸指標の一部

においてのみ隣接の諸景観単位から明確に区別されるにすぎないと、かれは指摘する⁶⁾。

ちなみに、1988/89年のデュースブルク・ラインハオゼンのクルップ製鉄所閉鎖がきっかけとなり、NRW政府が地域政策の重視に向かうようになった。そこでZIN (*Zukunftsinitiative für die Regionen Nordrhein-Westfalens*)-*Regionen* が設定された。これは現在の5行政地区 *Regierungsbezirk* より小さく、いくつかの郡級都市と郡との組み合わせからなるものである。ニーダーラインには *Niederrhein* (Duisburg市, Wesel・Kleve両郡), *MEO* (Mülheim・Essen・Oberhausen 3市), *Mittlerer Niederrhein* (Düsseldorf・Krefeld・Mönchengladbach 3市, Mettmann・Neuss・Viersen 3郡) の3地域が設定された。このうちZIN-Niederrheinは *NiederRhein* と自称し, *Niederrheinische Industrie- und Handelskammer Duisburg-Wesel-Kleve* 管区, よって上級中心地デュースブルクの引力圏と重なる。他方で同じくデュースブルク引力圏内のオーバーハオゼンとミュールハイム, さらにまたデュセルドルフとの絡み合いを切断することになる。逆にクレーフエ南部 (ゲルデルン地域) は伝統的に上級中心地クレーフルトの引力圏内にある。総じて *NiederRhein* は, ミュンスターラント, ルール地域, デュセルドルフ-ノイス-メンヘングラトバハとの間に明確な境界を引くことが難しい。要するに「ニーダーライン」は現代の地域政策においても便宜的な呼称にとどまるとというのが, ブローテフォーゲルの見解である⁷⁾。

カトリック神学史学者 *Bussmann* によれば, 地理的空間としてのニーダーライン概念 (以下, 煩を避けるために括弧を略す) には, (i) ケルンの北からクレーフエ, エメリヒのあるネーデルラント国境までの空間, (ii) アイフェル北部からアーヘン地域を経てニーダーライン沃野 *Börde* にいたる空間, (iii) とくに [バート] ゴーデスベルクからエメリヒまで, 西はケルン・リエージュ大司教領間の境界, 東はベルク地域の山腹までの地域。すなわちケルン選帝大司教領, ユーリヒ, クレーフエ, ベルク西部の諸公領域, (iv) デュースブルク市とバーゼル, クレーフエ両郡, 以上のようないくつかの規定があり, 明確な境界を引くことが容易でない。しかも, 1815年までニーダーラインにいかなる大領邦も形成されず, 小領邦, 小教会領が政治的自立性を維持し, 1815年に全地域がプロイセン領になったときでも, 行政的統一がでただけで, 共同意識が生まれたわけではなかった⁸⁾。ニーダーライン概念の多義性, 不明確性を指摘する点で, かれもブローテフォーゲルと見解を同じくする。

近代史学者 *Hantsche* も, ニーダーラインの地理的概念規定が容易でないことを指摘する。ベストファーレンとの境界はところによりライン河から15kmも離れていないので, ベストファーレンの縁部もニーダーライン地域とされたところがある (たとえばミュンスター行政区ボルケン郡のアンホルト)。地誌からすればこれは妥当である。18世紀末にラインとベストファーレンの諸領邦は強く結びついており, ケルン選帝侯領にケルン大修道院領 (Erzstift Köln) のほかベストファーレン伯領とベスト・レクリングハオゼン (Vest Recklinghausen) が所属し, 1723年以降ケルン選帝侯はミュンスター司教領を同君連合により支配していた。

ラインのクレーフエ公領とベストファーレンのマルク伯領は、1609/1614/1666 のブランデンブルク・プロイセンの支配下に移るはるか前（1398 年）から統合していた。西側でもニーダーラインからマース河流域への移行が漸次的で、1815 年マース河の東側 0.5 マイル、すなわち大砲の射程距離に国境線が引かれ、かつてのゲルデルン公領の歴史的一体性を破壊した。その結果、マース河流域のドイツ領になった部分もニーダーラインの一部となってしまった。ニーダーラインの北限は独蘭国境とはほぼ一致するが、南限については不明確である。南限のケルン湾状地は地誌上ニーダーラインに属するが、ニーダーラインとは言われない⁹⁾。

以上から、ニーダーラインが自然地理的にも人文地理的にも不正確もしくは不明確な概念であることが明らかである。

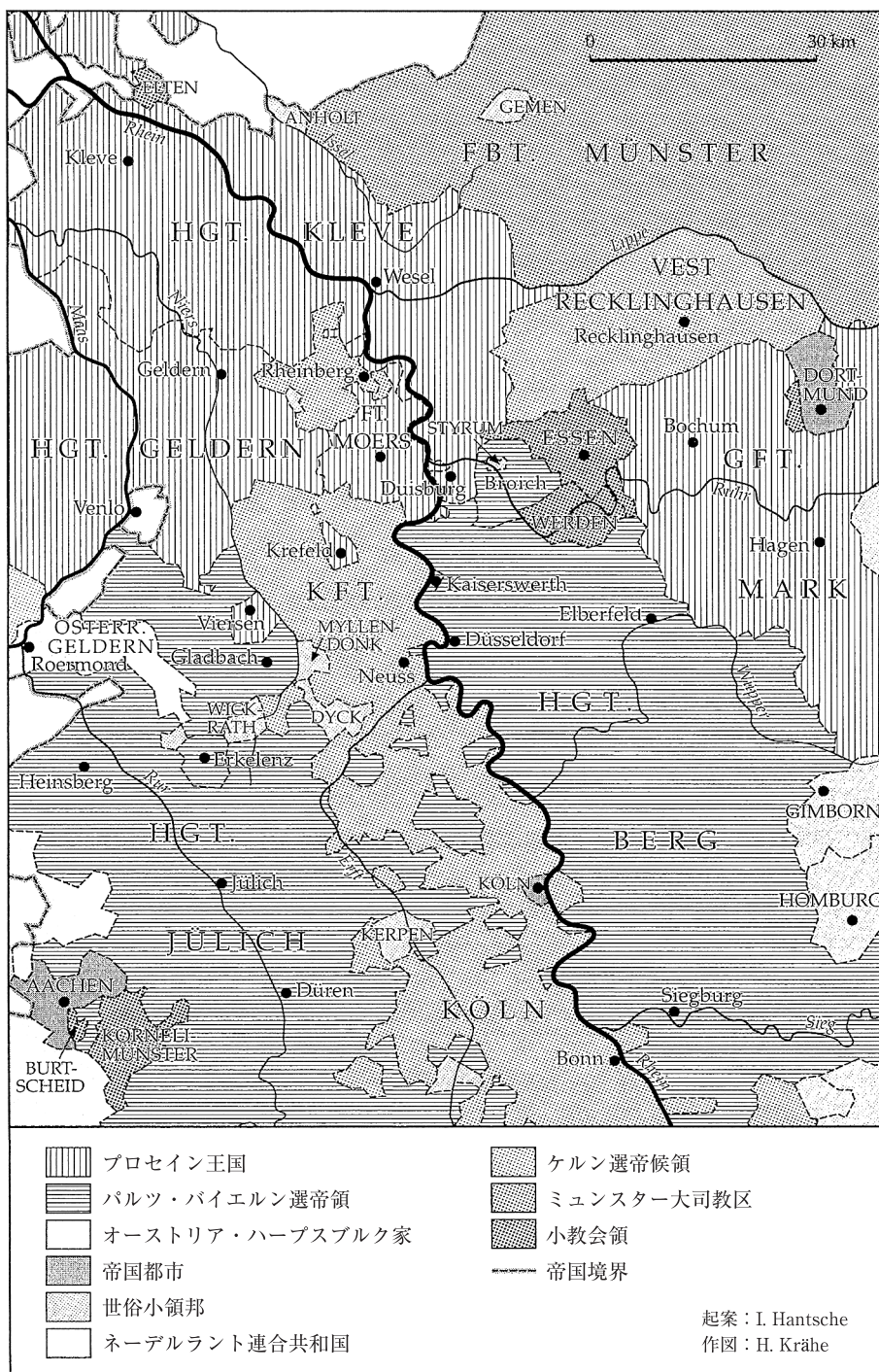
ii) 行政史・政治史的「継ぎはぎ細工」としてのニーダーライン

歴史的にみるならば、この地域が政治史的、行政史的雑多性に特徴づけられて一体性に欠けていたこと（図 VIII-3 を参照）、また、このような歴史的形相を一変させたのが革命期フランスのライン左岸域併合であったことを、各論者が指摘する。

まず社会経済史学者 *Feldmann* によれば、1794 年のライン河下流左岸の政治地図は色とりどりの「継ぎはぎ細工」*Flickenteppich* であった。一次対仏同盟戦争を終わらせた 1797 年のカンポ・フォルミオ講和条約でフランスがライン河左岸域を併合したことにより、ドイツ・ライヒの特徴であった領邦分立 *Vielstaaterei* が一挙に除去され、ラインの諸領邦は初めて統一体として現れた。フランスによる支配の決定的功績は、ライン側左岸域の領邦分裂を除去し、1815 年のプロイセンへの、1871 年のドイツ・ライヒへの統合を少なからず容易にしたことである¹⁰⁾。

ブローテフォークルも次のように言う。ミュンスターラントやオストフリースラントと異なり、ニーダーラインは集団の記憶に保持され、今日の地域的一体性の基盤となりうる共通の歴史を持つ地域でない。たしかにニーダーラインにも地域形成の歴史的起点があった。とりわけ 1299 年から 1521 年にかけて次々に進んだニーダーラインの諸公国、ユーリヒ、ベルク・ラーフェンスベルク、クレーフエ・マルクの統合 *Vereinigung* がそれである。ヨハン三世とビルヘルム五世の両公爵のもとで、ニーダーラインの統合公国は 1538-43 年にゲルデルンも加え、16 世紀の一時期に一大地域勢力となった。しかし不運が重なってこれは長続きせず、ニーダーラインの比較的大きな領邦は分割され、クレーフエ・マルク（1702 年にメーアス *Moers*・クレーフェルト、1713 年にゲルデルン南部）はブランデンブルク・プロイセンに、ユーリヒ・ベルクはバルツ・ノイブルクに（したがって 18 世紀にバイエルンに）併合された。クレーフエ、ユーリヒ、ベルクの間に多くの飛び地に細分されたケルン大司教領がはまりこみ、その他多数の帝国直属の伯領、騎士領、修道院領、ケルン、アーヘン両帝国都市によって、この近代初期の領邦政治の継ぎはぎ細工が仕立てられたのである。ニーダーライン北部

図 VIII-3 ニーダーラインの諸領邦（1789 年）



出所：Hantsche, Flüchtlinge und Asylanten am Niederrhein, 130 頁。

で自立性を具えた領土的・政治的一体性は、せいぜい 16 世紀に一時的にできたにすぎない。それ以後この地域の展開は政治的、宗教的雑多性により、そして 19 世紀以降は辺境性により特徴づけられている¹¹⁾。

寄稿の表題に「継ぎはぎ細工」という語を使ったハンチェも次のように言う。クレーフェ、メーアス、ゲルデルンは 1713 年にともにプロイセン領となったが、プロイセン王国内部では従来の境界が保持された。幾多のドイツ諸侯の努力をもってしても実現できなかった、統一原則のもとで領土を統治する国家制度の創出が、フランス人により一挙に実現し、ラインラントでも多数の領邦の分立状況がフランス人により一掃された。ラインラントにとっても、ゆえにニーダーラインにとっても抑圧的なフランスの支配、さもなければ小領邦への分裂状態への回帰の危険に直面して、プロイセン支配に服するほかの選択肢はなかった。1800 年ごろの政治地図の変動は、単なる国境の移動、廃止、支配者の交替だけでなく構造的変動だったのである¹²⁾。

ニーダーラインの近代政治史を特徴づけるのは、古いライヒの雛型ともいえるべき中小領邦の分立状況と、これを一掃したフランスによる支配、そうしてウィーン会議でその遺産を受け継いだプロイセンの統治権確立であった。

iii) 多元的言語空間

「ニーダーライン」を刻印する雑多性は言語史にも反映している。言語学者 *Cornelissen* によれば、ニーダーラインの書き言葉は、18 世紀末にドイツ語、ネーデルラント語が、話し言葉は各地の方言が使われていた。19/20 世紀に書き言葉が標準ドイツ語 (das Standard-deutsche) に統一され、話し言葉は標準ドイツ語 (Hochdeutsch)、ニーダーライン会話語、局地的方言の三層構造をなした。19 世紀初に使われた書き言葉は、もっぱらネーデルラント語がゲルデルン、二言語併用がクレーフェ、エメリヒ、ドイツ語がメーアス、デュースブルクであった¹³⁾。

とくにゲルデルンの事例が興味深い。プロイセン領ゲルデルンのマース河左岸域では 18 世紀末もっぱらネーデルラント語が使われ、右岸域および飛び地フィーアゼンでもこれが優勢であった。しかし、フランス領期にドイツ語圏のルール県 *Roer-Departement* に組み入れられたためにドイツ語への転換が始まり、1815 年以降プロイセン領に残った部分に対してドイツ語が強制された。庶民の会話語としてこれ以降もネーデルラント語方言が使われ、今日でも多少それが残っているが、プロイセンのゲルデルンに対するドイツ語化政策は、ニーダーラインの二言語併用の消滅に導いたのである¹⁴⁾。

民族国家の確立が独蘭国境で政治国境と言語国境とを一致させる結果をもたらしたことは否むべくもないにせよ、部分的にであれ今日にいたるまでニーダーラインの会話語の一部にネーデルラント語の痕跡が残っていることは興味深い。それはドイツ語、ネーデルラント語

の深い血縁関係を示唆するものである。中世には一つの共通言語地域であったニーダーラインで、*ermn*に限らず *EUREGIO* でも *ERW*でも国境分断効果の最たるものが言語障壁とされる現状は、むしろ戦後人口の社会変動、とくにニーダーラインに流入した中・東部ドイツからの難民、被追放者の増大が、新たに言語障壁を高めた結果でないのかという疑問さえ誘発するのである。

iv) 教会分裂と寛容の宗教空間

ニーダーラインはカトリック、改革派、ルター派、メノー派、ユダヤ教徒等が共存し、宗派間の対立が戦乱を招くほど先鋭化しなかったことが特徴とされる。ただしこの解釈は論者により相異なる。

ブスマンは宗教的分裂が地域意識の成立を阻んだことに批判的眼を向ける。かれによれば、アオクスブルク宗教和議（1555年）で確立した領邦教会制（「統治者の信仰がその領内で行われる」*cuius regio eius et religio*）により、ニーダーラインのような領土的に分裂した地域は支配者によって宗教政策が異なり、カトリック（ゲルデルン）、改革派（メーアス）、「中間の道」（*via media*：クレーフェで一時、厳密な意味での領邦教会制の成立を阻む）が混在し、16世紀後半に領土と信仰の相違を超えて拡がるいかなる地域意識も生まれなかった。その意味でニーダーラインの「宗教の時代」*das konfessionelle Zeitalter*は1945年まで続いたというのが彼の見解である。これに対して戦後は、住民構成が避難民、外国人労働者、他地域からの流入で多様性を増し、交通基盤の多面的な発展で全人口の流動性が高まったことで、1945年まで思考様式を染め上げた信仰色が褪せ、その結果ニーダーライン住民意識の一体化のための条件が過去400年より整ったと、逆説的な解釈を施す。かれによれば、ニーダーライン宗教史の最大の画期点はフランス革命でもウィーン会議でもドイツ帝国成立でもなく、二次大戦の敗戦なのである¹⁵⁾。

ブローテフォォーゲルも、領邦次元でさえ宗派統一が不徹底であったことを批判的に指摘する。かれによると、領邦教会制の原則が徹底しなかったクレーフェ、ベルク両公国では、ドイツで他に例を見ない局地的信仰の寄木細工 *Gemengelage* が成立した。ニーダーラインでは他の地域でも16世紀の政治地図が今日の信仰分布に反映している。宗教境界は今日にいたるまで同時に婚姻、移住、交際の限界でもあった¹⁶⁾と言い、ブスマンと逆に宗教の時代が戦後も続いているとの見解を示す。

他方で領邦教会制の不徹底と宗教的寛容をむしろ肯定的に観る論者もいる。教会史学者 *Stöve* は、1521年以来統合したユーリヒ・クレーフェ・ベルク三公領とマルク伯領、それらに属する諸地域（とくにラーフェンスベルク）をニーダーラインと呼び、この地域が今日ニーダーラインと呼ばれる地域を大幅に超えていることを認めた上で、ニーダーラインの教会史の独自の伝統として、*Heinrich Lutz* にしたがって「中間の道」*via media* と呼ばれる16世

紀のエラスムスの教会政策、領邦貴族と領主との対立の際に良心を審判基準とすることの早くからの承認、領邦君主による教会統治から独立した教会制度たるプロテスタント教会における教会会議 (Synode) 原則、以上三つを挙げる。そうして、このような教会生活の様式はネーデルラントからの知的「移転」なしに実現できなかったものであると、かれは指摘する。ここではすべての知識人や人文主義教育を受けた者が、教会生活の状況の改革を願っていた。しかし誰ひとりとして教会の分裂を欲していなかった。改革か伝統墨守かの二者択一を性急に過ぎるとみる少なからぬ知識人、司教、政治家を擁したニーダーラインの統合公領の状況は、例をみないものだった。ここでは数十年にわたり「中間の道」の信念に基づく教会政策が首尾一貫して行われ、宗教改革が教会分裂を惹き起すことなく実施された。これが比較的短期に終わったといえ、「中間の道」政策の終焉はこの地に根づいた「中間の道」傾向の終りを意味しない¹⁷⁾ というのが、シュテーベの解釈である。かれは、宗教的不寛容を是とする立場からつねに批判と疑惑の眼を向けられる宗教的寛容と諸宗派雑居にこそ、「ニーダーライン」の宗教の時代がむしろ理性と自己抑制が働いていたことを見出そうとしているかのようである¹⁸⁾。

v) ネーデルラントからの影響

これまでの検討のなかで近代初期のニーダーラインとネーデルラントとの強い結びつきがすでに示唆されてきたが、ネーデルラントからの経済的、文化的影響が 19 世紀にいたるまでニーダーライン各地で通奏低音のように続いたことがあらためて注目される。

中世史学者 *Scheler* によれば、ライン河下流域は 18 世紀にいたるまで *Niederlande* と呼ばれていた。これは 15 世紀にブラバントより北、フリースラントより南の地域をさす語として使われた。大雑把にいえば、この時代ニーダーラインから北海岸にいたる空間は、ブルグンド宮廷文化を模範とする一つの共通文化圏を形成していたと、かれは観る。他方で、これと一見相反するような「田舎者根性」*Localborniertheit*、「お偉方経済」*Honoratiorenwirtschaft*、「教区政治」*Kirchturmspolitik* と揶揄されるほどの、局地的、地域的な同族的つながりが根を下ろし、プロテスタンティズム [とくに自治体原則に立つ改革派] の影響もあってこれが 18 世紀末まで続いたことも指摘する。

続いてシェーラーは、18 世紀に入ると植民地大国ネーデルラント [ホラント] の吸引力が、15/16 世紀のブルッヘ、アントウェルペを中心とするフラーンデレより強くなったと言う。ネーデルラント人が牧畜と海運に集中したため、クレーフェルト、メンヘングラトバハやライン右岸のベルク、マルクの工業都市までも、ネーデルラント向けおよびそこからさらに海外向けの輸出のために生産し、アムステルダムは西部ドイツにとり最大の貿易港となった。アムステルダムは近代初頭にすでにドイツの貿易港と言われていたのである。ウィーン会議による西部の国境決定も大きかった。政治的理由からプロイセン領ゲルデルンがマース河で

切断され、かつての空間的一体性が根本的に破壊された。そのとき以来ニーダーラインはドイツの、田園的アハテルフク *Achterhoek*（「片隅」、ネーデルラントの東部を指す）になり始めた。ニーダーラインは工業地域と国境の中間地帯となり、政治的にも、経済的にも18世紀までと逆に東を向くにいたり、今日なおそうである。かつてのクレーフエの首都デュースブルクは重工業が衰退したといえ、周辺 *Umland* の中心地とあらためて自己を位置づけ直し、後者もまたデュースブルクを中心地と認識するようになった。すなわちニーダーラインの東方指向に変わりがないというのが、シェーラーの理解である¹⁹⁾。

かれはニーダーライン経済史を発展から衰退へという動きで捉え、その転換点を1815年のウィーン会議、すなわち独蘭国境画定にみているようである。これにより西のネーデルラントとの一体性を分断されたためニーダーラインの産業発展がとまり、東のルール地域の周辺部という位置づけに甘んじざるをえなくなったという解釈である。この解釈はクレーフルト、メンヘングラトバハをニーダーラインの外部または縁辺にあるとすることを前提としており、ニーダーラインの経済空間を狭く限定しすぎるきらいがある。ともあれ、近代初期ニーダーライン経済がネーデルラント不可分に結びついていたことの指摘は傾聴に値する。

シュテューベもニーダーラインがネーデルラントから強い影響を受けてきたことを強調する。かれによれば、ニーダーラインは明確な輪郭を持つ単一体でなく、根拠とすべき部族 *Stamm* もなく、明確な宗教上の特徴もなく、政治的帰属が次々に変わる歴史を持ち、民族性からしてもいささか怪しい。そうして何よりも外国から、わけでも隣のネーデルラントからの理念の輸入を享受してきた。統合公領内で成立した改革派教会はさしあたりネーデルラントからの避難民教会であった。それは1568年ベーゼルでの会合、1571年エムデンでの教会会議で一つの教会団体に結集した。独立の教会会議に基づく教会組織は、とりわけベルクとマルクに浸透していたルター派教会にも後に採用された。改革派とルター派の二つの教会制度はいかなる領邦君主の教会統治にも服さず、各領主の支配地域を越えて部分的にケルン選帝司教領にも成立した。ニーダーラインには今なお、ネーデルラントとの密接な近隣関係のお陰で発展しえた多くの側面が典型的な形で残っているのである²⁰⁾。

この講演録にただ一人2論考を寄稿しているハンチェも、ニーダーラインに宗教と産業をもたらしたネーデルラントからの宗教難民の果たした歴史的役割を論じている。彼女が焦点を当てるのは、カルバン派を受け入れたルター派のベーゼルとメノー派を受け入れたカルバン派のクレーフルトである。まずベーゼルについて彼女は次のように言う。クレーフエ・ユーリヒ・ベルク・マルク・ラーフェンスベルク統合公領の領主ビルヘルム富裕公 *Wilhelm der Reiche* はエラスムスから強い影響を受け、カトリシズムとルター主義との「中間の道」に沿う教会改革に努めた。ハープスブルク家によるネーデルラント弾圧政策と対照的に異なる統合公領の宗教的寛容政策は、プロテスタントに比較的大きな行動の余地を与えた。統合公領はワロニやフラーンデレからの難民がまず向かう目的地となり、クレーフエ公領ではベー

ゼルに難民が集中した。その理由は、この都市がネーデルラントに最も近い位置にあり、すでにネーデルラントと深い経済的関係を結んでいただけでなく、市参事会も市民の多くも新移住者を積極的に受け入れたからである。その動機は宗教よりも経済であった。1540年に公然とルター派に変わった市民の大半が当初カルバン派の移住者を敵視したが、1560年代以降ネーデルラント人に寛容をもって接するようになったのはすぐれて経済的理由による。すなわち、16世紀末に経済的衰退に向かい始めたベーゼルに、フランドル出身者を中心とするネーデルラント人が、繊維工業の新しい製造技術と取引関係を持ち込んだお陰で、ベーゼル経済が盛り返すことができたのである。毛織物工業だけでなく絹工業もまた、ネーデルラント人によりベーゼルに初めてもたらされた。1567/68年にベーゼルは1000人以上の難民を受け入れた。70年代に迫害が最高潮に達したとき、7000～8000人のネーデルラント人がベーゼルに住み、全人口の40%を占めたほどである。1585年以降も推定4000人が在住した。カルバン派のネーデルラント人はルター派教区の内部でその教義を広め、しだいにカルバン派市民を増やしていった。1568年にベーゼルでネーデルラント人難民の最初の全体教会会議 *Generalsynode* が開かれ、翌年にはネーデルラント人改革派教会の最高会議 *Konsistorium* が設置された。このような前史を経て、ブランデンブルク・プロイセンが統合公領の支配権を握った1609年にベーゼルはカルバン派に正式に変わったのである。

この時代カルバン主義はニーダーラインの他の地域にも浸透していった。クレーフェ公領の首都デュースブルクでも当初の敵視のあとネーデルラント人が許容され、ルター派はしだいにカルバン派によりおしのけられて行った。16世紀末にデュースブルクの教会制度がカルバン派の方式に変えられたほどである。総じて16世紀のネーデルラント人難民はニーダーラインに避難地を見出すことができた。その理由は宗教的寛容もしくは信仰上の共感というよりも、むしろ経済関心だった。ネーデルラント人難民の故郷である南ネーデルラントの諸州、フランドル、ブラバント、アルトア、ヘネガウは経済的、社会的先進地であった。そのため難民がニーダーラインでも経済発展を先導し、しかも受入れ地の商工業者との摩擦を避けることができるならば、かれらは歓迎され、そのカルバン派信仰の普及のための条件を整えることさえできたのである²¹⁾。

ついでメノー派がとり上げられる。メーアス伯領は16世紀のうちに公式にプロテスタンティズムに変わり、宗教難民の避難地となっていた。ネーデルラント総督オラーニエ家支配が1607年に始まり、宗教的寛容が保証されたメーアスは他の多くの領邦のなかで際立った存在となった。カルバン派のオラーニエ家の公子たちは領邦教会制の権利を行使せず、カトリックも容認するほどだったからである。1542年以来このメーアス伯領の飛び地となったクレーフェルトへのメノー派流入の波は、1654年ごろと1694年の2回あった。ただし、いずれもかつての統合公領の一部がカトリック化したためそこから流出した難民であって、ネーデルラント人難民ではない。しかし、メノー派は16世紀末にネーデルラント人メノー・シモンズ

Menno Simons（1496-1561）に始まった平和主義的信仰集団で、ネーデルラントからニーダーラインにも広がり、後者の信者たちはネーデルラントの同胞集団と深く結びついていた。また、メーアス伯領の低ドイツ語がネーデルラント語と似ているため、クレーフェルトに言語国境が事実上なかったのである。カルバン派のクレーフェルト市民は当初、宗派的対抗からも経済的競争からもメノー派に敵対したが、オラーニエ家の総督府はメノー派の経済力を認めて保護し、1657年彼らにクレーフェルト在留権を与えた。こうして17世紀末までにメノー派はクレーフェルトに根を下ろし、1793年に独自の教会堂を建立するまでにいたった。クレーフェルトはバーゼルよりも宗教的要因がより強く作用したといえ、宗派对立はメノー派の経済力と社会的同化努力とにより相対化されたのである²²⁾。

4) 小括

ニーダーライン近代史の検討から、この地が近代に入ってネーデルラントからみてもドイツからみても**辺境**であったこと、経済と文化の波が18世紀までは西から、19世紀以降は東から繰り返しおし寄せて非等質性を再生産し、地域的一体性の成熟を妨げてきたことが明らかになった。しかし逆説的ながら、ライン・マース地域がまさに異質の諸要素の混在性という点で、一種の空間的等質性を具えていることも見過ごすことができないのである。あたかも、吹き溜まりがその内部構成は非等質的な堆積にすぎないとしても、外状が一つの形をなしているかのようにである。それでは、このような歴史的空間特性を具えるライン・マース地域において、過去の「文化空間」への回帰を準拠枠とする空間政策にどのような現実的意義を見いだせるのだろうか。この疑念は、回帰すべき「文化空間」と思われているものがそもそもどのようなものであったのかという問を誘発する。

そこでまず確認されるべきことは、ウィーン会議により確定し現代まで続く独蘭国境が強力な分断効果を発揮する前の時代に、現国境を越えて広がる一体化した文化空間があったはずと考えるのは歴史的幻想だということである。すでにみたように地域史の専門家たちはマース・ライン空間が、政治史・行政史的に「継ぎはぎ細工」以外の何物でもなく、それは文化面にも妥当すると観ることで一致している。現国境がまだなかったことは国境そのものがなかったことを意味しない。それにも拘わらず、現国境を越える地域的一体性の準拠枠を過去の「文化空間」に求めようとすれば、それは領邦分立の「古き良き、しかし小・さ・き」昔に帰るだけに終わるだろう。

ここで、以下二点を付け加えておきたい。第一に、総じて文化が等質空間を形成し、地域形成の基盤になるとしても、地域的文化空間が多層的入れ子構造を具えることである。エウレギオ単位の文化空間的一体性の強調は、入れ子構造の文化空間の中から *ermn* という小領域空間に相当する層だけを恣意的に固定することにならないか。逆にまた、*ermn* 空間の一構成部分（下層）の局地的文化の一体性を、*ermn* 全体のそれに一般化することにならないかと

いう問題を、すべてのエウレギオの文化政策が孕んでいるように思われる。

第二に、マース・ライン地域の文化的、政治的一体性が弱かったことは、経済発展のための制度基盤の不備の一面が否めないにしても、経済過程による新しい空間形成をむしろ容易にしたのではないかということである。もっとも、このような辺境における「ラインの産業革命」が生み出した資本制経済空間が、1815年に固定された政治国境を超え出ていることはありうるにしても、それは経済空間として固有の境界（漸移帯）を持つはずである。ただし、それがブスマンが待望するようなネーデルラントとフラーンデレを含む全ライン・マース地域の言語の、今では忘れられた共通性の蘇生による文化圏の外延と重なるか否かは、今後の研究に待つほかない²³⁾。

注

- 1) euregio rhein-maas-nord : INTERREG IIIA (abgeschlossen): <http://www.euregio-rmn.de/de/euregio-foerderungen/interreg-iiia-abgeschlossen.html>, 2010/4/21.
- 2) Gemeinsames INTERREG-Sekretariat bei der euregio, *Bilanz 2004 INTERREG III*, 2005, 8 頁の行論を参照。
- 3) 重点分野 5 の 15 企画のなかでとりわけ問題を孕んでいるのが、この企画である。プロイセンのゲルデルン支配がネーデルラント側からもなぜ「遺徳」*Tugend* として評価されるのか、ただちには理解しがたい。そこで、ゲルデルンの歴史に一瞥を加えることにしよう。近代史学者 *Hantsche* によるとそれは以下ようになる。中世に強盛を誇ったゲルデルン公領は近代初頭に独立を失い、その後分割が繰り返され、今日ではネーデルラント、ドイツ、ベルギー領に分属するばかりか、ゲルデルンとしての地域的自己意識さえ失ってしまった。16 世紀末に神聖ローマ帝国の西北部でまだ領土の一体性を保持していたゲルデルン公領は、1538 年最後のゲルデルン公カール・フォン・エグモントの死後、その後継者と目されたクレーフェ公太子が、1539 年ビルヘルム五世公としてユーリヒ、クレーフェ、ベルク、マルク、ラーフェンスベルクの統合公領に君臨することになったので、加えてゲルデルンをも手中にすればニーダーラインの一大領邦に統合されたかもしれない。しかし、これを嫌ったハープスブルク家のカール五世が、ゲルデルン継承戦争でビルヘルム五世公に決定的勝利を取め、その結果フェンロー条約（1543 年）でゲルデルン公領全域がハープスブルク家のものになった。ゲルデルン領域はネイメーヘ (*Betuwe*)、アルンヘム (*Veluwe*)、ズイトフェ *Zutphen*、ルールモント (*Oberquartier*) の 4 地区 *Quartier* から成り、なかでも南部の飛び地である最後者は経済的に重要地区で、ゲルデルン、フェンロー、ケセル *Kessel*、ルールモント等の各市を擁した。1555/56 年のカール五世による帝国分割でゲルデルン全域がネーデルラントとともにスペイン領に変わった後も、前者は神聖ローマ帝国に属し続けた。やがてネーデルラント独立戦争（80 年戦争、1568-1648 年）で北部の 3 *Niederquartier* がユトレヒト同盟議会 *Staten-Generaal* に移り、1648 年ネーデルラント連邦共和国の一部となって最終的に神聖ローマ帝国から離脱した。これは現ヘルデルラントとほぼ重なる。他方で南部ゲルデルン (*Oberquartier*) はスペイン王国領に残った。しかしスペイン継承戦争（1701-1714 年）の結果これはさらに 4 分割され、ネーデルラント連邦共和国はユトレヒト条約（1713 年）およびプロイセンとのバリエール (*Barriere*) 条約（1715 年）で、クリケンベク管区 (*Amt Krickenbeck*) に属するフェンローとベーセル *Beesel*、モントフォルト (*Montfort*) 管区、ステ

ーフェンスウェルト *Stevensweert* 要塞、ニュースタト *Nieuwstadt* を獲得し、これらの地域はドイツ帝国から離脱した。オーストリアは地区中心地（Hauptort）ルールモント、エルンプト、ニーダークリュヒテン *Niederkrüchten*、ベークベルク *Wegberg*、さらにマース河左岸域のいくつかの所領を得た。ユーリヒ領に囲まれたゲルデルンの飛び地エルケレンツ *Erkelenz* はユーリヒ公領になった。これらに対して南部ゲルデルンの大半を獲得したのが、プロイセンである。マース河東側に広がるゲルデルン、シュトラレーン、バハテンドンク *Wachtendonk*、クリケンベク（飛び地のフィーアゼンも含めて）の4管区、マース河右岸に広がるケセル管区、その他いくつかの所領、さらに北の飛び地ミデラール *Middelaar* を手中に収めた。すでにスペイン継承戦争のさなか1703年に、プロイセンはゲルデルン要塞ほかやがて自領となる地域の大半を占領していた。当企画で「300年前にゲルデルン市ほかがプロイセンにより占領された」としているのはこれを指す。従来の地区中心地ルールモントがオーストリア領になったので、ゲルデルン市が新設のプロイセン領ゲルデン公領の行政中心地となり、同時に駐屯地ともなった。ゲルデルン公領とともにプロイセンはカトリック地域を初めて領土に抱えるにいたり、ユトレヒト条約でプロイセン国王はゲルデルンの諸身分の信仰を保証することを義務づけられた。言語面でも、この新領土は19世紀に入っても数十年間ネーデルラント語が優勢な言語圏に属した。プロイセンにとりゲルデルン統合は容易でなかったというのが、ハンチュエの解釈である。Irmgard Hantsche, *Atlas zur Geschichte des Niederrheins*, 5. Aufl., Bottrop/Essen 2004, 70-71, 94-95 頁。

旧ゲルデルン公領を最終的に解体したのはウィーン会議である。マース河の東沿いに大砲の射程距離に国境線が引かれ、これは歴史的に成長して一体となった地域を分断し、風俗、文化、言語を共にした住民を分け隔てる結果を招いた。プロイセン領からネーデルラント領に変わった地域はヘルデル県に属することなく、リンビュルフ県となった。こうしてゲルデルンはもはや地域名でなくなり、かつての南部ゲルデルンはドイツ側でも、ネーデルラント側でもゲルデルン/[ヘルデル]と呼ばれず、ドイツ側部分は地理的にむしろマース地域に属するにも拘わらずニーダーラインの一部とされるにいたった。さらに大幅な郡再編過程で1974年末ゲルデルン郡が新設のクレーフェ郡に統合され、ゲルデルンはわずかに市名に残るのみとなった。同上書、130-131 頁。

ちなみにブランデンブルク・プロイセンのニーダーライン進出は、ハンチュエによればおよそ次のような経過を辿った。1609年のユーリヒ・クレーフェ領主の家系断絶のあと、クサンテン条約（1614年）およびクレーフェ条約（1666年）で、バルツ・ノイブルクがユーリヒ、ベルク両公領を、ブランデンブルクがクレーフェ公領とマルク、ラーフェンスベルク両伯領とをそれぞれ獲得した。これによりブランデンブルクはライン河域への進出を初めて果たすことができた。次いで、ブランデンブルク大選帝侯とオラーニエ家王女との結婚により、1702年ブランデンブルク・プロイセンはメーアス伯領とその飛び地クレーフェルトを取得した。上述のようにユトレヒト条約で南部ゲルデルンの大半を獲得したことにより、ニーダーラインにおけるプロイセンの地位が支配的となった。ナポレオン戦争中ティルジット条約（1807年）でエルベ以西の領土の放棄を余儀なくされたプロイセンは、ウィーン会議でいったん失った旧所領を取り戻しただけでなく、全ラインラントを手中に収め、いまやニーダーラインの独占的支配者となるにいたった。同上書、96-97 頁。

以上のように、中小領邦が分立したニーダーラインは統合公領の成立により16世紀前半に内発的政治統合の方向性が生みだされたにも拘わらずそれが挫折し、オーストリア（ハーブスブル

ク家)、ブランデンブルク・プロイセン(ホーエンツォレルン家)、バルツ・ノイブルク/バイエルン(ビテルスバハ家)の角逐の場となった。結局、革命期フランスが、分立する中小領邦を一掃したのを奇貨として利用することに成功したプロイセンが、ラインラント形成によってライン河下流域に国家統合の枠組みをはめたのである。しかしそれは、ドイツとネーデルラントの国境を絶対化することにもなった。これを象徴するのがゲルデルンの解体と消滅である。

このような歴史に眼を向けるならば、当企画に参加したネーデルラント側の真意は何かが問われるところである。ゲルデルン公領南部が北部から切り離されてプロイセン領になったことが、プロイセンの西方拡張政策に一段階を画したことを考慮するならば、これをもって *ermn* の文化空間的等質性を再認識しようとすることは理解に苦しむ。プロイセンのゲルデルン支配を「遺徳」として讃えるドイツ側にあえて異を唱えるまでもないほどに、ネーデルラント側がプロテスタント・プロイセンの対ニーダーライン宗教・言語政策にともなうある程度の「寛容」を評価しているということなのだろうか。

- 4) グレーフェンブローホは 12 世紀にマースラントのケセル伯の所領となり、13 世紀にケルン選帝候領の封土となった。ケセル家の断絶の後 14 世紀初にユーリヒ伯領となった。*Handbuch der historischen Stätten Deutschland : Nordrhein-Westfalen*, 2. Aufl., Stuttgart 1970, 265 頁 ; Fritz Siefert, *Das deutsche Städtelexikon*, Stuttgart 1983, 190 頁。
- 5) Dieter Geuenich (hrsg.), *Der Kulturräum Niederrhein : Von der Antike bis zum 18. Jahrhundert*, Bd. 1, 1996 ; *Im 19. und 20. Jahrhundert*, Bd. 2, 1997, Bottrop/Essen。これはデュースブルク大学と登記社団・文化空間ニーダーラインの共催で、1996 年と 1997 年に 2 回に分けて行われたのべ 16 人の演者による連続講演会の記録である。政治・行政・文化史の分野で多面的かつ通時的な検討が施されているが、社会・経済史分野が手薄であるのが惜しい。
- 6) Hans Heinrich Blotevogel, Gibt es eine Region Niederrhein? Über Ansätze und Probleme der Regionsbildung am unteren Niederrhein aus geographisch-landeskundlicher Sicht, *Kulturräum*, Bd. 2, 158-159, 164 頁。
- 7) 同上論文, 178-179, 183 頁。
- 8) Claus Bussmann, Gibt es “Niederrheiner”? Historische Gründe für das Fehlen eines niederrheinischen Identitätsbewußtseins, *Kulturräum*, Bd. 1, 161-162 頁。
- 9) Irmgard Hantsche, Vom Flickenteppich zur Rheinprovinz. Die Veränderung der politischen Landkarte am Niederrhein um 1800, *Kulturräum*, Bd. 2, 12-13 頁。ちなみに、Vest Recklinghausen の Vest は Veste の短縮形で Feste (要塞) と同義語である (*Duden ; Wahrig*)。前掲の *Handbuch der historischen Stätten Deutschland* によれば、Vest は *Gogericht* を意味する (625 頁)。これは *Gaugericht* と同義であると推認されるので (*Duden*)、Vest Recklinghausen は「レクリングハオゼン地方裁判所管区」の意味であろう。
- 10) Irene Feldmann, Der Niederrhein in der Franzosenzeit. Die französische Verwaltung im Departement Roer 1798-1814, *Kulturräum*, Bd. 2, 51, 53-55, 66 頁。
- 11) Blotevogel, 前掲論文, 172-173, 176 頁。
- 12) Hantsche, 前掲論文, 13, 28, 44-46 頁。
- 13) Georg Cornelissen, Zur Sprache des Niederrheins im 19. und 20. Jahrhundert. Grundzüge einer regionalen Sprachgeschichte, *Kulturräum*, Bd. 2, 87-88 頁。コルネリセンは *das Standarddeutsche* と *Hochdeutsch* を区別しているが、その言語学上の根拠が非専門家の筆者に不明である。とりあ

「地域のヨーロッパ」の再検討（6）

えずともに「標準ドイツ語」と訳出しておくが、専門家のご教示を乞う。

- 14) Hantsche, *Atlas*, 98-99 頁。ちなみに。12 世紀に「ライン・マース三角域」に今日のドイツ語でもネーデルラント語でもない「ライン・マース語」*das Rheinmaasländische* が統一書き言葉として成立したという。*Atlas*, 66-67 頁。
- 15) Bussmann, 前掲論文, 162-164 頁。
- 16) Blotvogel, 前掲論文, 173 頁。
- 17) Eckehart Stöve, Die Religionspolitik am Niederrhein im 16. Jahrhundert und ihre geschichtlichen Folgen, *Kulturraum*, Bd. 1, 70-71, 78 頁。彼はロテルダムのエラスムスを教会改革の「中間の道」の始祖 *Ahnher* と呼んでいる。71 頁。
- 18) Hantsche, *Atlas*, 76-81 頁の地図と解説も 16-17 世紀のニーダーラインの宗教事情の理解に参考になる。
- 19) Dieter Scheler, “Die niederen Lande” : Der Raum des Niederrheins im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit, *Kulturraum*, Bd. 1, 93, 104, 107, 110-112 頁。
- 20) Stöve, 前掲論文, 67, 85-86, 88 頁。
- 21) Irmgard Hantsche, Flüchtlinge und Asylanten am Niederrhein vom 16. Bis 18. Jahrhundert, *Kulturraum*, Bd. 1, 117-123 頁。
- 22) 同上, 124-126, 129 頁。ちなみに、メーアスは 1519 年ノイエンアール (Neuenahr) 伯領になり、宗教改革を遂行した。1600 年に所領をオラーニエ家が継承し、1702 年プロイセン国王がクレーフエ公の資格でこれを取得し、1707 年侯領になった。Gerhard Köbler, *Historisches Lexikon der deutschen Länder : Die deutschen Territorien vom Mittelalter bis zur Gegenwart*, 7. Aufl., München 2007, 433 頁。
- 23) Bussmann, 上掲論文, 165 頁。